

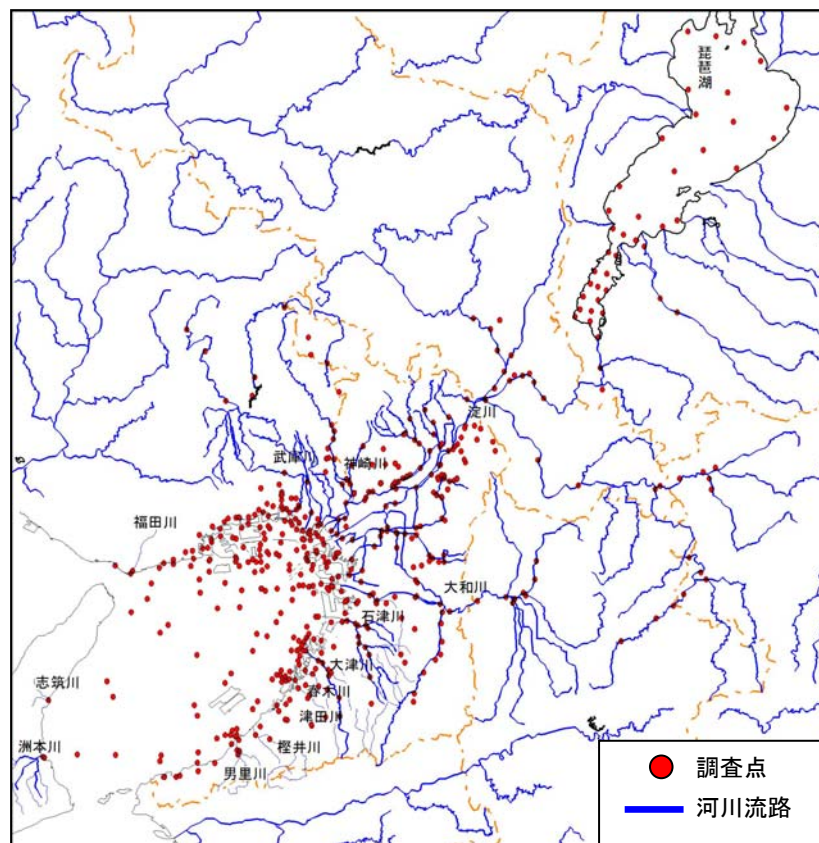
平成 26 年度夏季 大阪湾再生水質一斉調査の結果について

はじめに

- ・大阪湾再生推進会議^{注)}では、大阪湾再生の取組の一環として、陸域・海域で連携した大阪湾再生水質一斉調査を平成 16 年度から夏季に実施しています。
- ・今年度は、平成 25 年度に引き続き民間企業、大学などの協力を得て、広域的かつ官民協働の調査を実施しました。
- ・このたび、本調査の結果がまとまりましたので概要をお知らせします。
なお、今回のデータは、今後の精査により訂正される場合があります。

調査概要

- ・本年度は、平成 26 年 8 月 5 日を中心に実施し、海域 196 点、陸域の河川 320 点の計 516 点で調査を実施しました。



※河川流路は、主な河川のみを示している

図 1 調査位置

^{注)} 大阪湾再生推進会議：内閣官房都市再生本部事務局、国土交通省、農林水産省、経済産業省、環境省、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、京都市、大阪市、堺市、神戸市、(一財)大阪湾ベイエリア開発推進機構、大阪湾広域臨海整備センターで構成

表 1 調査概要（海域）

調査主体	調査点数	調査時期	調査層（COD、DO等）	
			表層	底層
国土交通省近畿地方整備局 神戸港湾事務所	11点	8/5	海面下1m	海底面上1m
第五管区海上保安本部	19点	8/12～13	海面下0.5m、1m	海底面上1m
大阪府環境保全課	15点	8/17	海面下1m	海底面上2m(一部5m)
大阪府港湾局	4点	8/5	海面下1m	海底面上2m(DOは1m)
大阪府南部流域下水道事務所	16点	8/5	海面下1m	海底面上1m
(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター	20点	8/11～12	海面下0m	海底面上1m(一部2m、5m)
大阪市環境局	6点	8/5	海面下1m	海底面上1m
大阪市港湾局	6点	8/5	海面下0.5m	海底面上1m
堺市環境局	4点	8/5	海面下1m	海底面上1m
兵庫県農政環境部環境管理局 水大気課	11点	8/5、7	海面下0.5m+2m 混合	海底面上1m
神戸市環境局	22点	8/13	海面下0.5m+2m 混合 (一部0.5m)	海底面上1m
西宮市環境局	6点	8/25	海面下0.5m+2m 混合 (一部0.5m)	海底面上1m
尼崎市経済環境局	3点	8/5	海面下0.5m、2m (一部0.5m)	海底面上1m
大阪湾広域臨海環境整備センター (尼崎沖)	4点	8/5	海面下0.5m、2m	海底面上1m、2m
(神戸沖)	4点	8/7	海面下0.5m+2m 混合	海底面上1m
(大阪沖)	5点	8/29	海面下1m	海底面上1m、2m
(泉大津沖)	6点	8/5	海面下1m	海底面上1m、2m
阪神高速道路(株)	1点	8/5	海面下1m	海底面上1m
関西電力(株)	1点	8/5	海面下1m	海底面上1m
大阪ガス(株)	1点	8/5	海面下1m	海底面上1m
新日鐵住金(株)	1点	8/5	海面下1m	海底面上1m
JFEスチール(株)	1点	8/5	海面下1m	海底面上1m
東洋建設(株)	1点	8/5	海面から0.5m間隔	海底面まで0.5m間隔
五洋建設(株)	1点	8/5	海面から0.5m間隔	海底面上1mまで0.5m間隔
日本ミクニヤ(株)	4点	8/5	海面下1m	海底面上1m
(株)環境総合テクノス	1点	8/5	海面から0.5m間隔	海底面まで0.5m間隔
いであ(株)	3点	8/5	海面下1m	海底面上1m
環境システム(株)	3点	8/5	海面から0.1m間隔	海底まで0.1m間隔
三洋テクノマリン(株)	4点	8/5	海面下1mから1m間隔	海底面上1mまで1m間隔
兵庫県立尼崎小田高等学校	1点	8/3	海面から0.5m間隔	海底面まで0.5m間隔
独立行政法人国立環境研究所	7点	8/4	海面下1m	海底面上1m
大阪市立大学	3点	8/5	海面から1m間隔	海底面まで1m間隔
大阪府立大学	1点	8/6	海面から0.5m間隔	海底面まで0.5m間隔
合 計	196点			

表 2 調査概要（陸域）

調査主体	調査点数	調査時期	備考
国土交通省 近畿地方整備局	104点	8/4～8、27	淀川水系：90点 大和川水系：14点
大阪府	57点	8/19～20	
大阪市	21点	8/5、26	
堺市	17点	8/19	
岸和田市	11点	8/21～22	
豊中市	8点	8/19～20	
吹田市	13点	8/6、19	
高槻市	6点	8/19～20	
枚方市	16点	8/19	
茨木市	5点	8/19	
八尾市	9点	8/19～20	
寝屋川市	17点	8/19～20	
東大阪市	4点	8/20～21	
兵庫県	3点	8/6、7	
神戸市	13点	8/6	
西宮市	15点	8/6、20、26	
大阪市立大学	1点	8/5	
合計	320点		

平成26年度の調査結果

本年度の調査は、平成26年8月5日を中心に実施しましたが、一部機関については悪天候等の理由により延期しました。8月13日を中心に実施した調査（8月11～17日に実施した調査）は、8月9～10日に通過した台風の影響を強く受けたと考えられることから、本年度の海域の結果については、8月5日を中心とした調査を前半、8月13日を中心とした調査を後半としてとりまとめました。なお、8月25日、29日に実施した調査については、調査日が離れているため調査結果には含めていません。

●調査日前後の気象状況

- ・前半の調査については、調査実施前の8月2～4日に5～13mm程度の降雨が観測されました。調査実施日の8月5日は曇時々晴れで、前日より2℃程高い気温でした。風については、調査当日に強い風が吹いていました。
- ・後半の調査については、台風の影響により、調査実施前の8月9～10日に80～120mm程度の大規模な降雨が観測されました。また、8月12日に11mm程度の降雨が確認されました。調査実施日の天気は曇でした。風については、調査実施前の8月10日に10m/sを超える強い風が吹いていましたが、調査当日は穏やかでした。

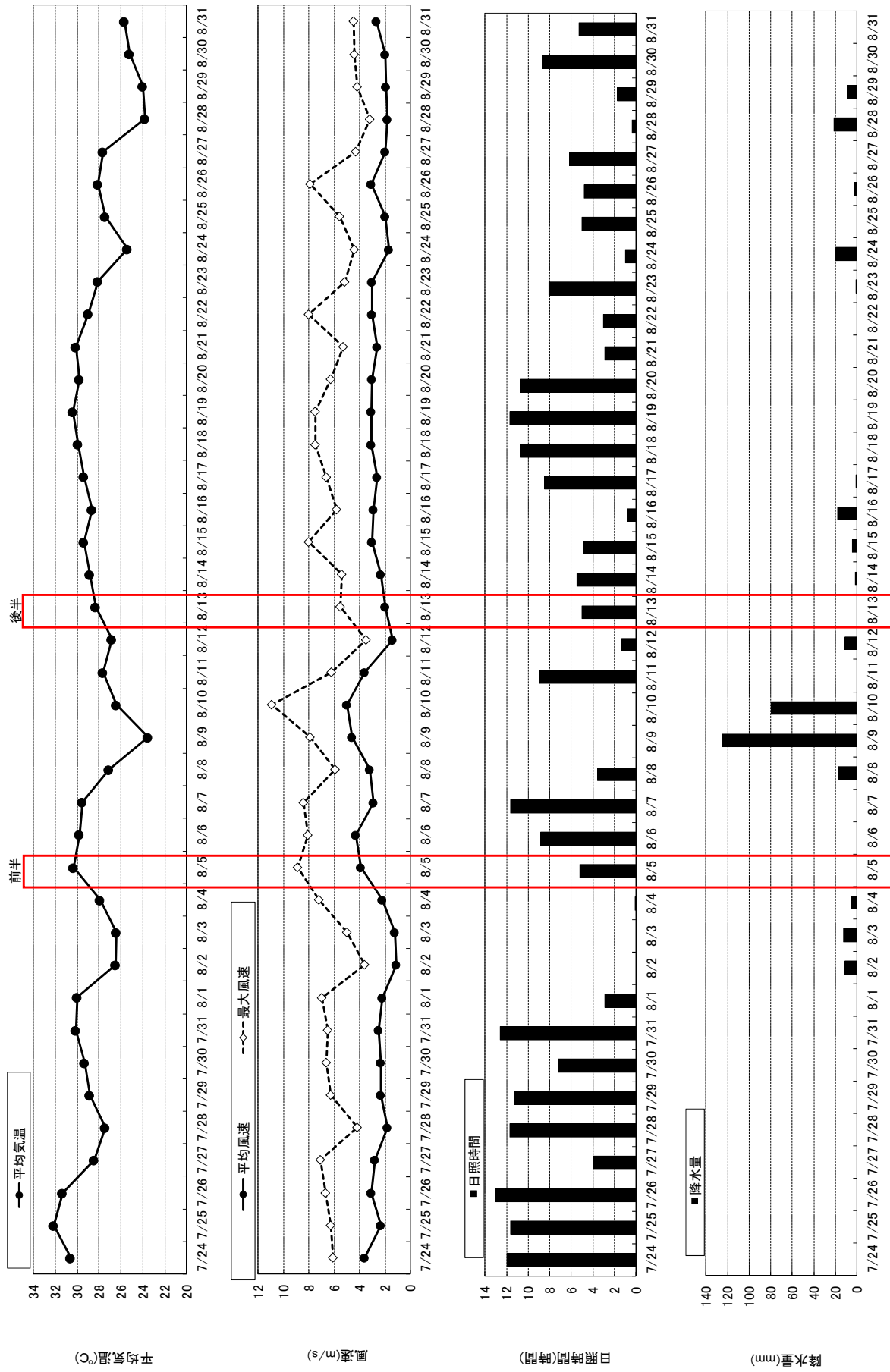
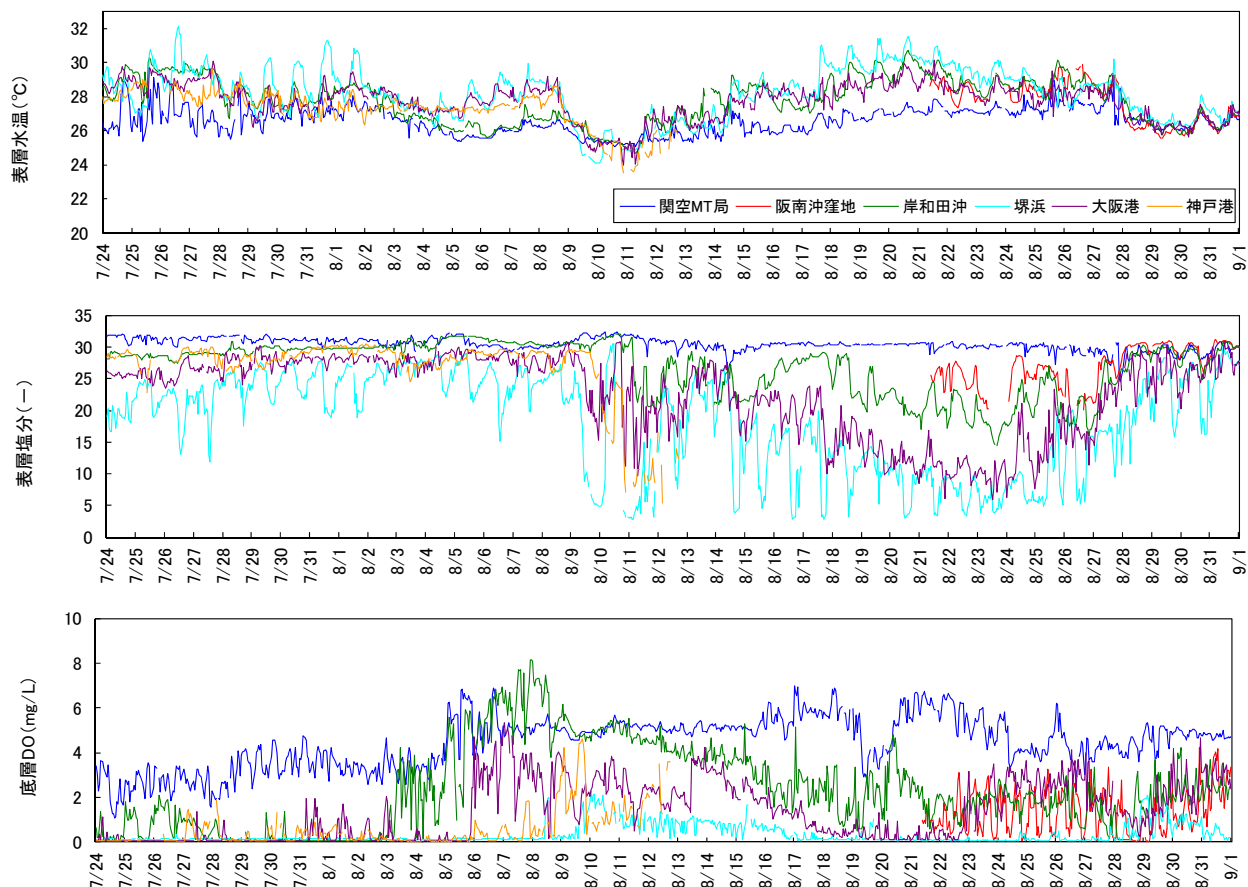


図 2 調査日前後の気象状況 (大阪管区気象台)

●調査日前後の水温、塩分、DO

- ・調査日前後の6地点で測定された表層水温、表層塩分、底層DOの経時変化を示します。
- ・連続データで見ると、表層水温、表層塩分、底層DOは時間的に大きく変動していることがわかります。
- ・8月5日の表層水温、表層塩分は、7月24日以降の値と比較すると、表層水温はやや低め、表層塩分は同程度となっていました。また、底層DOは、最も南側に位置する関空MT局および岸和田沖で高く、その他の地点では調査実施日まで概ね2 mg/L以下で推移していました。
- ・8月13日の表層水温、表層塩分は、8月1日以降の値と比較すると、表層水温は全地点においてやや低め、表層塩分は岸和田沖、堺浜、大阪港、神戸港において低い値となっていました。底層DOは、関西MT局、岸和田沖、大阪港において調査8～7日前から、堺浜および神戸港においても4～3日目から高い傾向にありました。調査日には関空MT局と岸和田沖で5 mg/L前後、大阪港、神戸港では2 mg/L前後、堺浜で2 mg/L以下で推移していました。



※表層：海面下1 m

※底層：関空MT局（海面下20～23m）、阪南沖窪地（6～20）、岸和田沖（海面下7～14m）、堺浜（海面下6～12m）、大阪港（海面下4～14m）、神戸港（海面下1～18m）

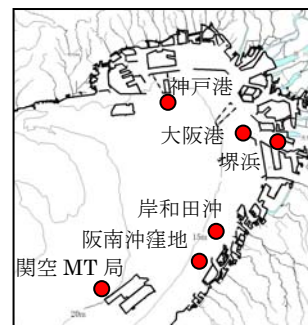
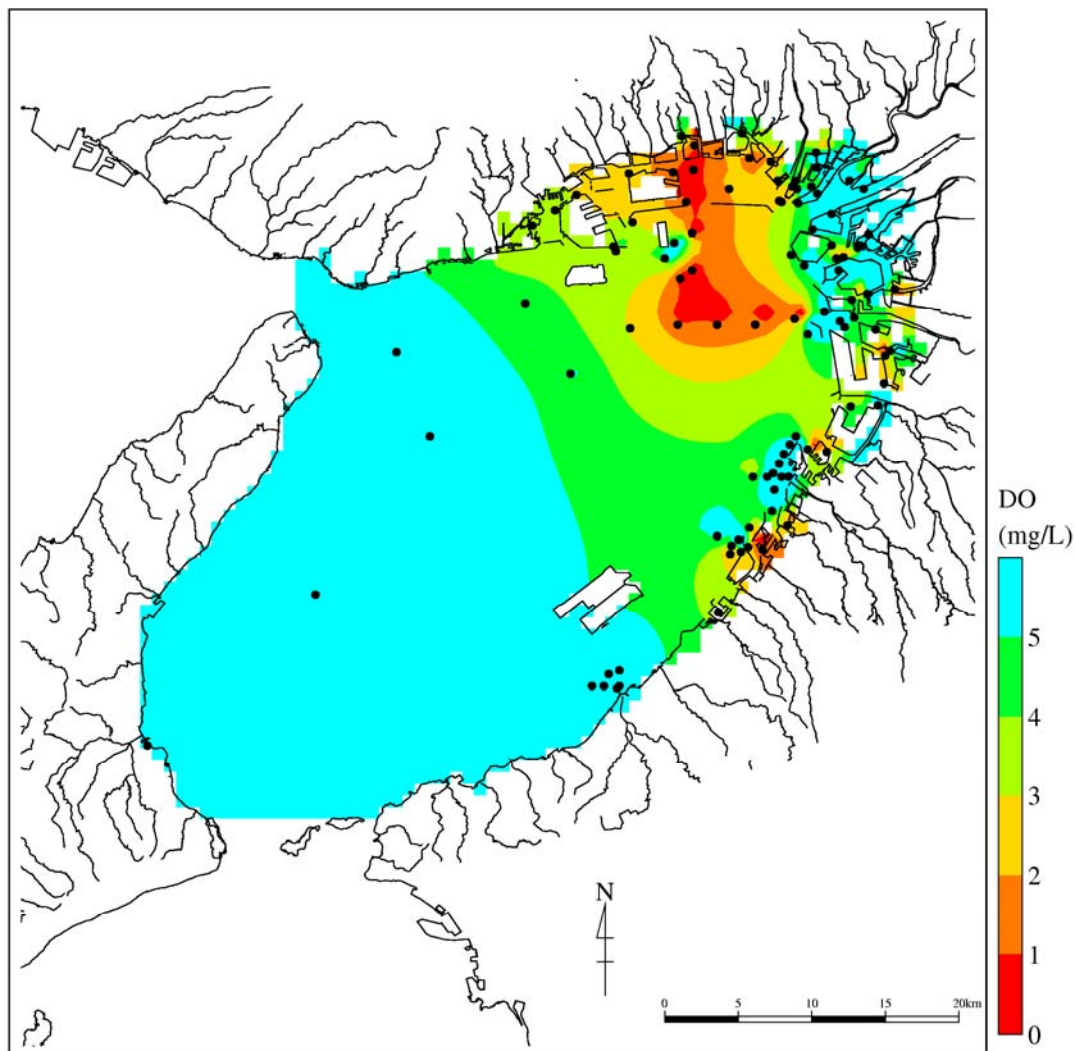


図3 調査日前後の水温、塩分、DO

●底層の溶存酸素量（DO）（前半）

- ・底層のDOは、大阪湾北東側の一部の海域で3 mg/L未満となっていました。淀川や神崎川の流入する岸近くでは、5 mg/L以上の海域もみられました。
- ・一方、大阪湾西側では5 mg/L以上となっており、東側と比較して高くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

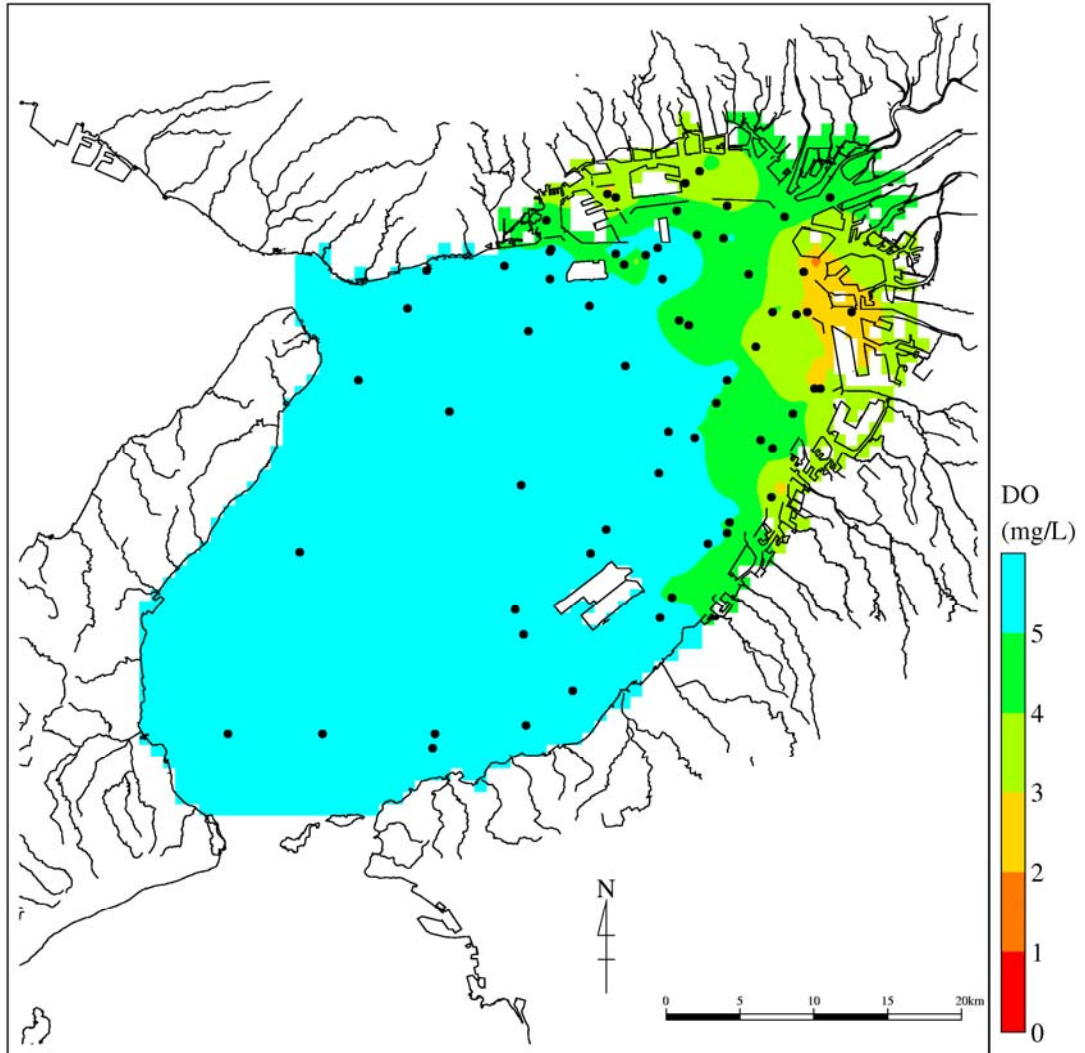
図 4 (1) 水質の水平分布（底層：DO）

【用語解説】

- ・溶存酸素量（DO）は、海水中に溶けている酸素量を示すもので、海域の生物生息環境状態を示す重要な指標です。
- ・値が高いほど海水中に溶けている酸素量が多いことを示します。

●底層の溶存酸素量（DO）（後半）

- ・底層のDOは、大阪湾北東側の多くの海域で3～5 mg/Lとなっていました。
- ・一方、大阪湾西側の広い範囲では5 mg/L以上となっており、東側と比較して高くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

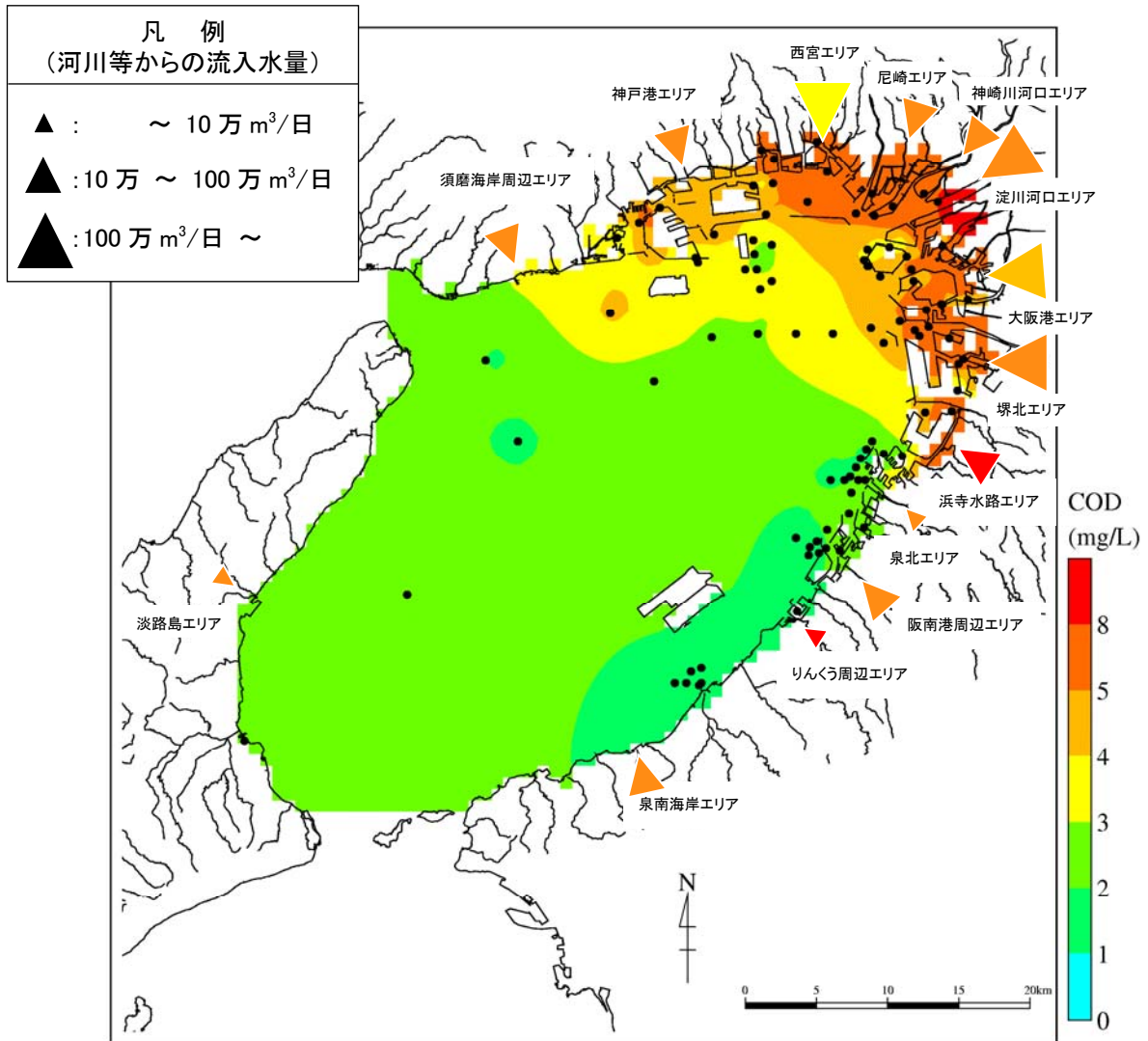
図 4 (2) 水質の水平分布（底層：DO）

【用語解説】

- ・溶存酸素量（DO）は、海水中に溶けている酸素量を示すもので、海域の生物生息環境状態を示す重要な指標です。
- ・値が高いほど海水中に溶けている酸素量が多いことを示します。

●表層の化学的酸素要求量（COD）（前半）

- ・陸域からの流入負荷量は、淀川や大和川が流入する大阪湾北東側で大きくなっています。
- ・表層のCODは、陸域からの流入負荷量の多い大阪湾北東側の海域で3 mg/L以上となっており、岸近くの多くの海域では5 mg/L以上となっていました。
- ・一方、大阪湾西側では東側と比較して低く、広い範囲で3 mg/L未満となっており、阪南港周辺エリアから泉南海岸エリアの岸近くでは2 mg/L未満の海域もみられました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

※陸域の水質は、エリア毎に次式で計算した

$$\text{エリア毎の水質} = \frac{(\text{各河川からの流入負荷量の合計} + \text{各下水処理場からの流入負荷量の合計})}{(\text{河川からの流入水量の合計} + \text{各下水処理場からの流入水量の合計})}$$

※陸域からの流入負荷量は、7~8月の観測データを基に作成しており、前半・後半で同データである

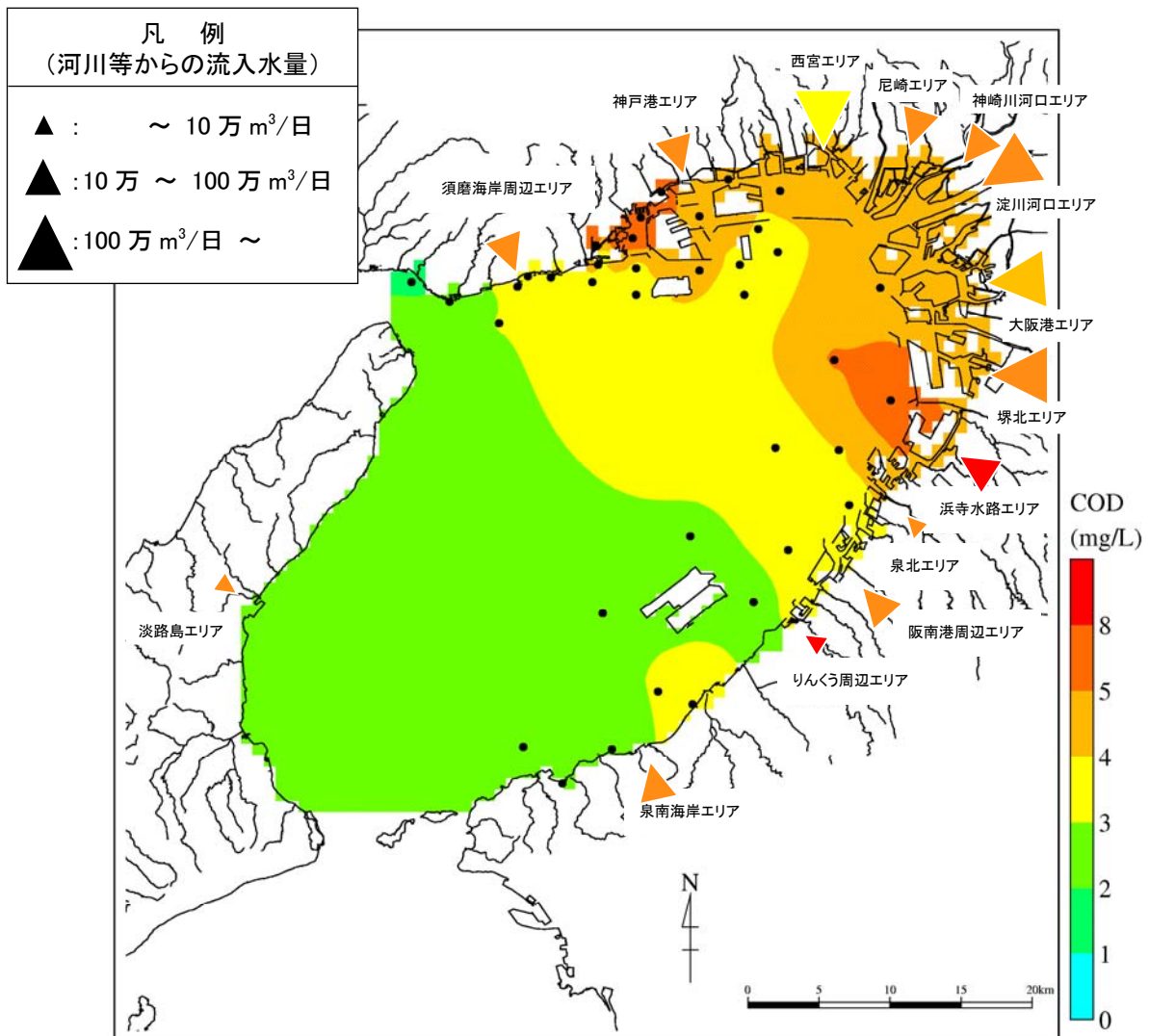
図 5 (1) 水質の水平分布 (表層: COD)

【用語解説】

- ・化学的酸素要求量（COD）は、海域の汚濁状況を表す代表的な指標です。
- ・値が高いほど海域が汚濁していることを示します。

●表層の化学的酸素要求量（COD）（後半）

- ・陸域からの流入負荷量は、淀川や大和川が流入する大阪湾北東側で大きくなっています。
- ・表層のCODは、大阪湾北東側の広い範囲で3 mg/L以上となっており、堺北エリアと神戸港エリアの岸近くでは5 mg/L以上の海域もみられました。
- ・一方、大阪湾西側では3 mg/L未満となっており、東側と比較して低くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

※陸域の水質は、エリア毎に次式で計算した

エリア毎の水質 = (各河川からの流入負荷量の合計 + 各下水処理場からの流入負荷量の合計)

÷ (河川からの流入水量の合計 + 各下水処理場からの流入水量の合計)

※陸域からの流入負荷量は、7~8月の観測データを基に作成しており、前半・後半で同データである

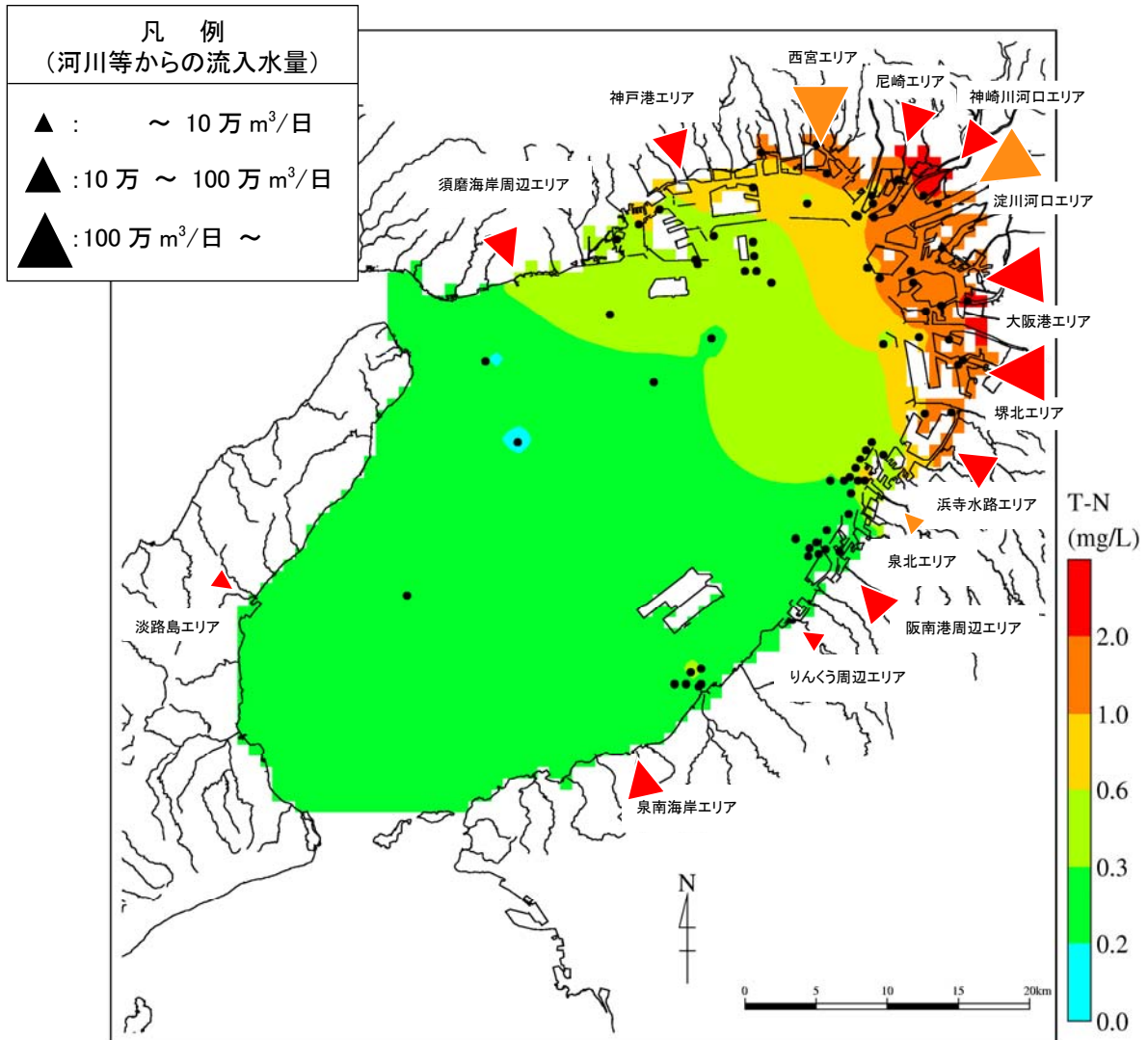
図 5 (2) 水質の水平分布 (表層 : COD)

【用語解説】

- ・化学的酸素要求量（COD）は、海域の汚濁状況を表す代表的な指標です。
- ・値が高いほど海域が汚濁していることを示します。

●表層の全窒素（T-N）（前半）

- ・陸域からの流入負荷量は、淀川や大和川が流入する大阪湾北東側で大きくなっています。
- ・表層のT-Nは、大阪湾北東側で0.3 mg/L 以上となっており、岸近くでは、1.0 mg/L以上となっていました。
- ・一方、大阪湾西側では広い範囲で0.3 mg/L未満となっており、東側と比較して低くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない
 ※陸域の水質は、エリア毎に次式で計算した

$$\text{エリア毎の水質} = \frac{\text{各河川からの流入負荷量の合計} + \text{各下水処理場からの流入負荷量の合計}}{\text{河川からの流入水量の合計} + \text{各下水処理場からの流入水量の合計}}$$

 ※陸域からの流入負荷量は、7～8月の観測データを基に作成しており、前半・後半で同データである

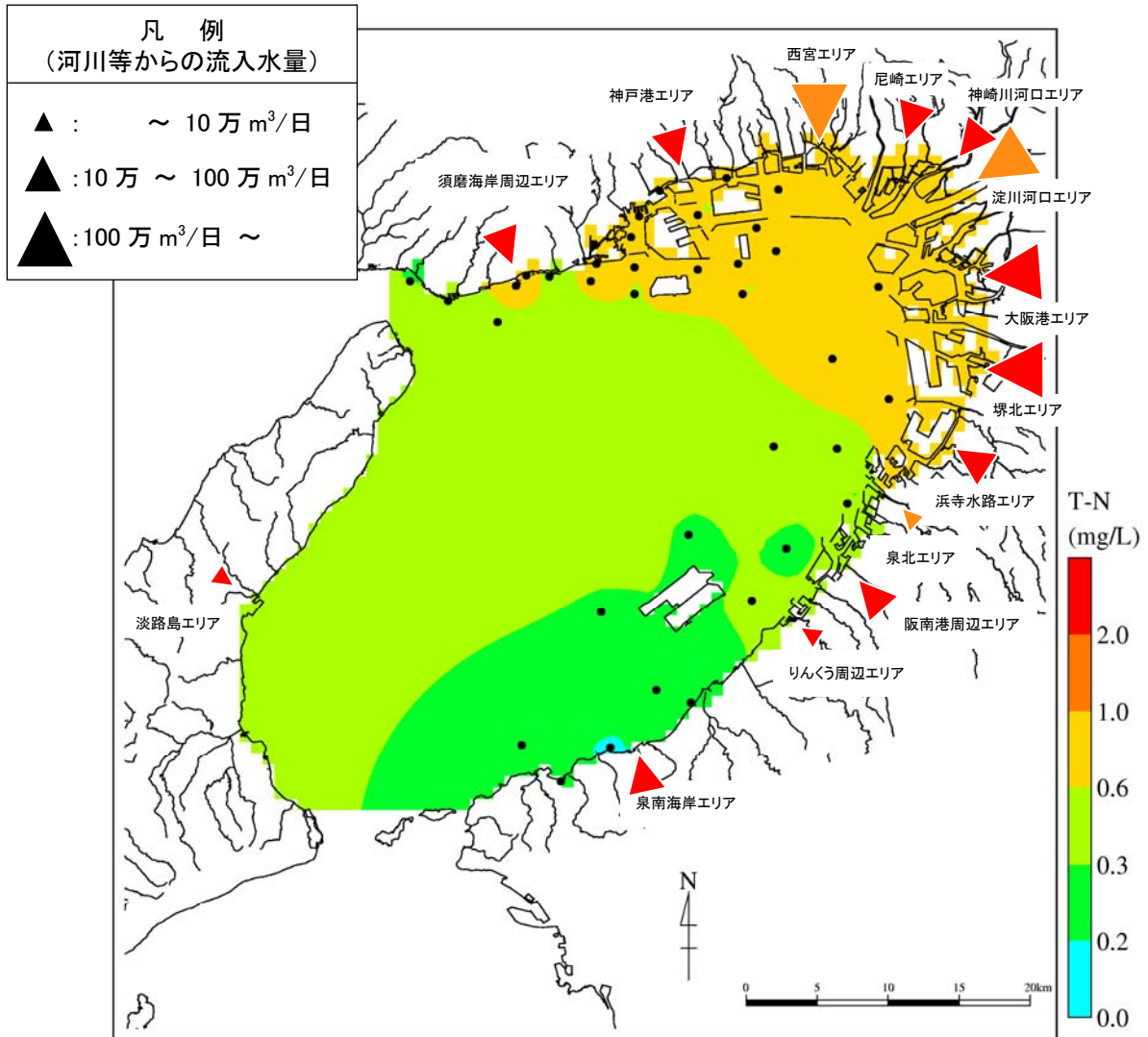
図 6 (1) 水質の水平分布（表層：T-N）

【用語解説】

- ・全窒素（T-N）は、海域の富栄養化状況を表す指標です。
- ・値が高いほど海域の富栄養化が進行していることを示します。富栄養化が進むと、植物プランクトンが増殖し、海中の有機物が増加するとともに、これらの有機物を分解する際に酸素が消費され、底層の溶存酸素量（DO）が低下します。

●表層の全窒素（T-N）（後半）

- ・陸域からの流入負荷量は、淀川や大和川が流入する大阪湾北東側で大きくなっています。
- ・表層のT-Nは、大阪湾北東側で0.6～1.0 mg/Lとなっていました。
- ・一方、大阪湾西側では広い範囲で0.6 mg/L未満となっており、東側と比較して低くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

※陸域の水質は、エリア毎に次式で計算した

$$\text{エリア毎の水質} = \frac{(\text{各河川からの流入負荷量の合計} + \text{各下水処理場からの流入負荷量の合計})}{(\text{河川からの流入水量の合計} + \text{各下水処理場からの流入水量の合計})}$$

※陸域からの流入負荷量は、7～8月の観測データを基に作成しており、前半・後半で同データである

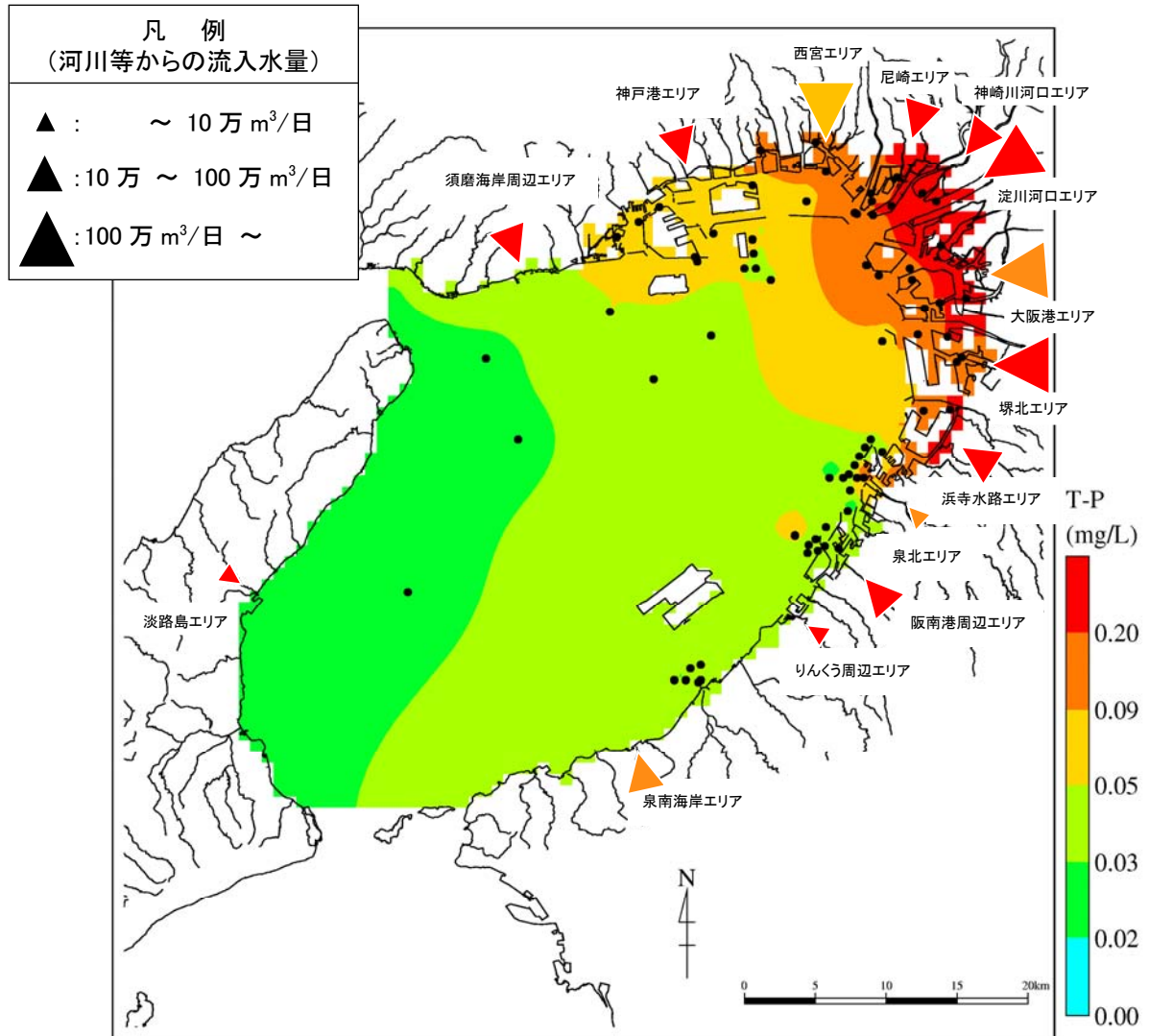
図 6 (2) 水質の水平分布（表層：T-N）

【用語解説】

- ・全窒素（T-N）は、海域の富栄養化状況を表す指標です。
- ・値が高いほど海域の富栄養化が進行していることを示します。富栄養化が進むと、植物プランクトンが増殖し、海中の有機物が増加するとともに、これらの有機物を分解する際に酸素が消費され、底層の溶存酸素量（DO）が低下します。

●表層の全リン（T-P）（前半）

- ・陸域からの流入負荷量は、淀川や大和川が流入する大阪湾北東側で大きくなっています。
- ・表層のT-Pは、大阪湾北東側の海域で0.05 mg/L以上となっており、岸近くでは0.20 mg/Lを超える高い値となった海域もみられました。
- ・一方、大阪湾西側では広い範囲で0.05 mg/L未満となっており、東側と比較して低くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

※陸域の水質は、エリア毎に次式で計算した

$$\text{エリア毎の水質} = \frac{\text{各河川からの流入負荷量の合計} + \text{各下水処理場からの流入負荷量の合計}}{\text{河川からの流入水量の合計} + \text{各下水処理場からの流入水量の合計}}$$

※陸域からの流入負荷量は、7～8月の観測データを基に作成しており、前半・後半で同データである

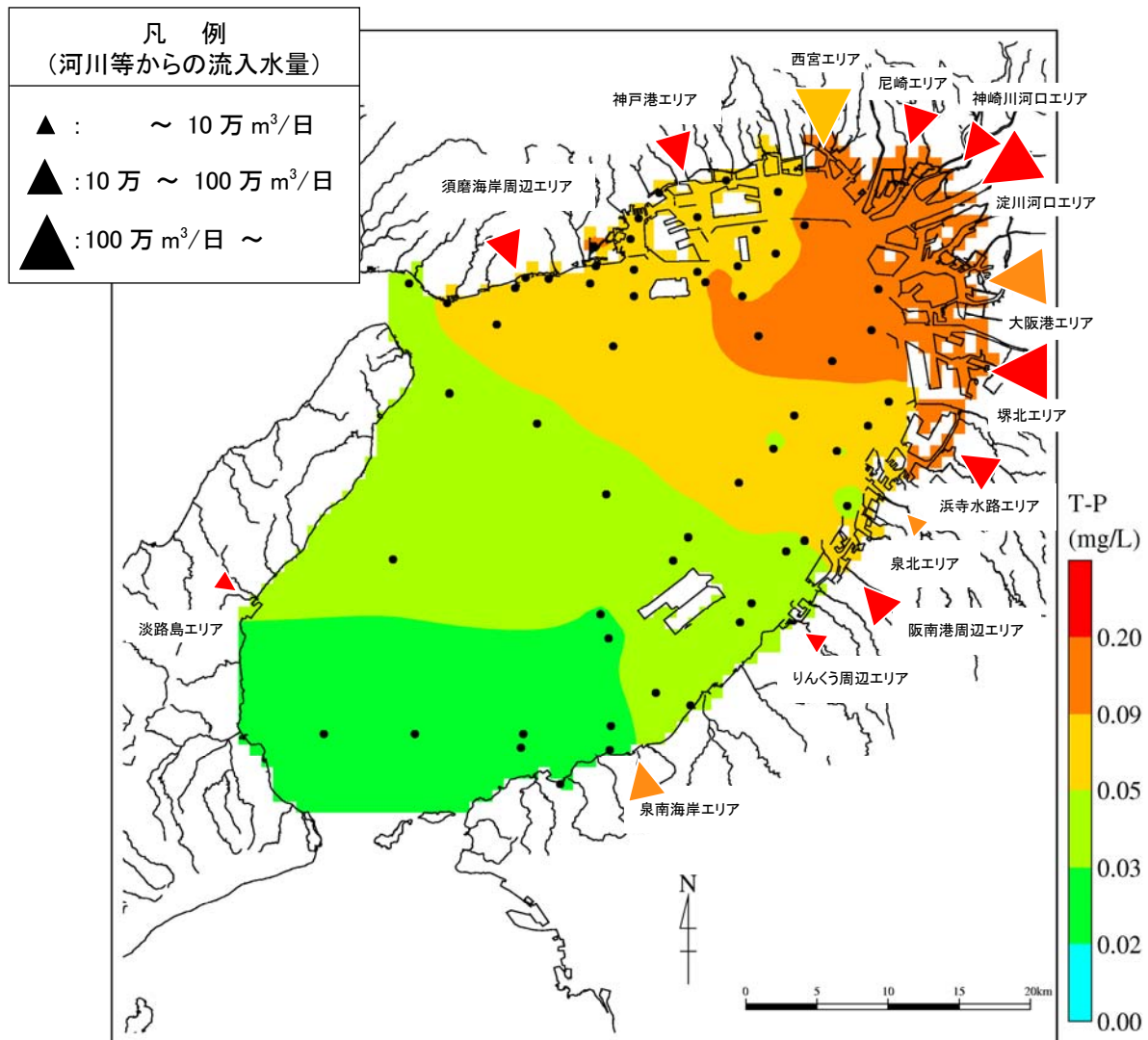
図 7 (1) 水質の水平分布（表層：T-P）

【用語解説】

- ・全リン（T-P）は、海域の富栄養化状況を表す指標です。
- ・値が高いほど海域の富栄養化が進行していることを示します。富栄養化が進むと、植物プランクトンが増殖し、海中の有機物が増加するとともに、これらの有機物を分解する際に酸素が消費され、底層の溶存酸素量（DO）が低下します。

●表層の全リン（T-P）（後半）

- ・陸域からの流入負荷量は、淀川や大和川が流入する大阪湾北東側で大きくなっています。
- ・表層のT-Pは、大阪湾北東側の広い範囲で0.05mg/L以上となっていました。
- ・一方、大阪湾西側では0.05mg/L未満となっており、東側と比較して低くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない
 ※陸域の水質は、エリア毎に次式で計算した

$$\text{エリア毎の水質} = \frac{(\text{各河川からの流入負荷量の合計} + \text{各下水処理場からの流入負荷量の合計})}{(\text{河川からの流入水量の合計} + \text{各下水処理場からの流入水量の合計})}$$

 ※陸域からの流入負荷量は、7～8月の観測データを基に作成しており、前半・後半で同データである

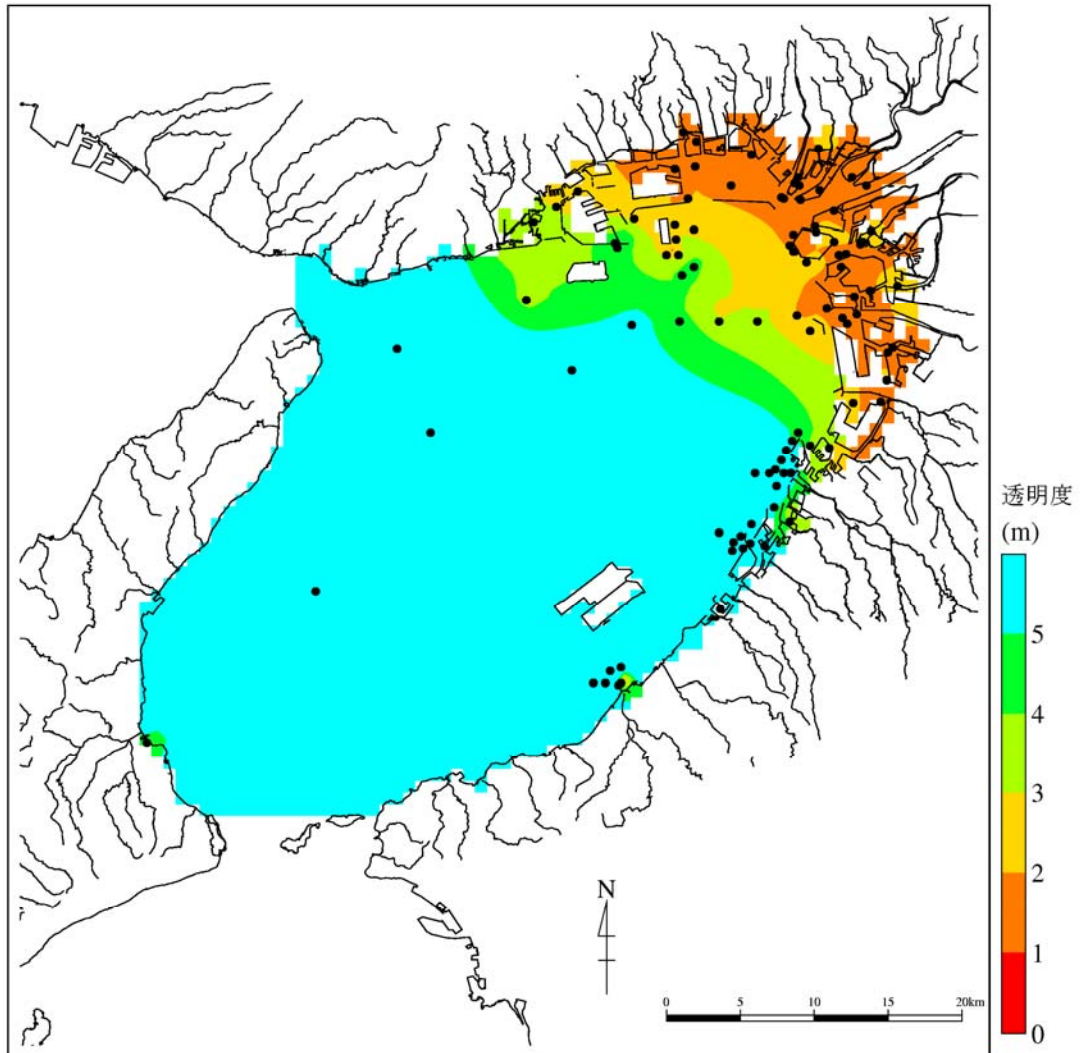
図 7 (2) 水質の水平分布（表層：T-P）

【用語解説】

- ・全リン（T-P）は、海域の富栄養化状況を表す指標です。
- ・値が高いほど海域の富栄養化が進行していることを示します。富栄養化が進むと、植物プランクトンが増殖し、海中の有機物が増加するとともに、これらの有機物を分解する際に酸素が消費され、底層の溶存酸素量（DO）が低下します。

●透明度（前半）

- ・透明度は、大阪湾北東側の海域では、5 m未満となっており、岸近くの海域では2 m未満となっていました。
- ・一方、大阪湾西側では広い範囲で5 m以上となっており、東側と比較して高くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

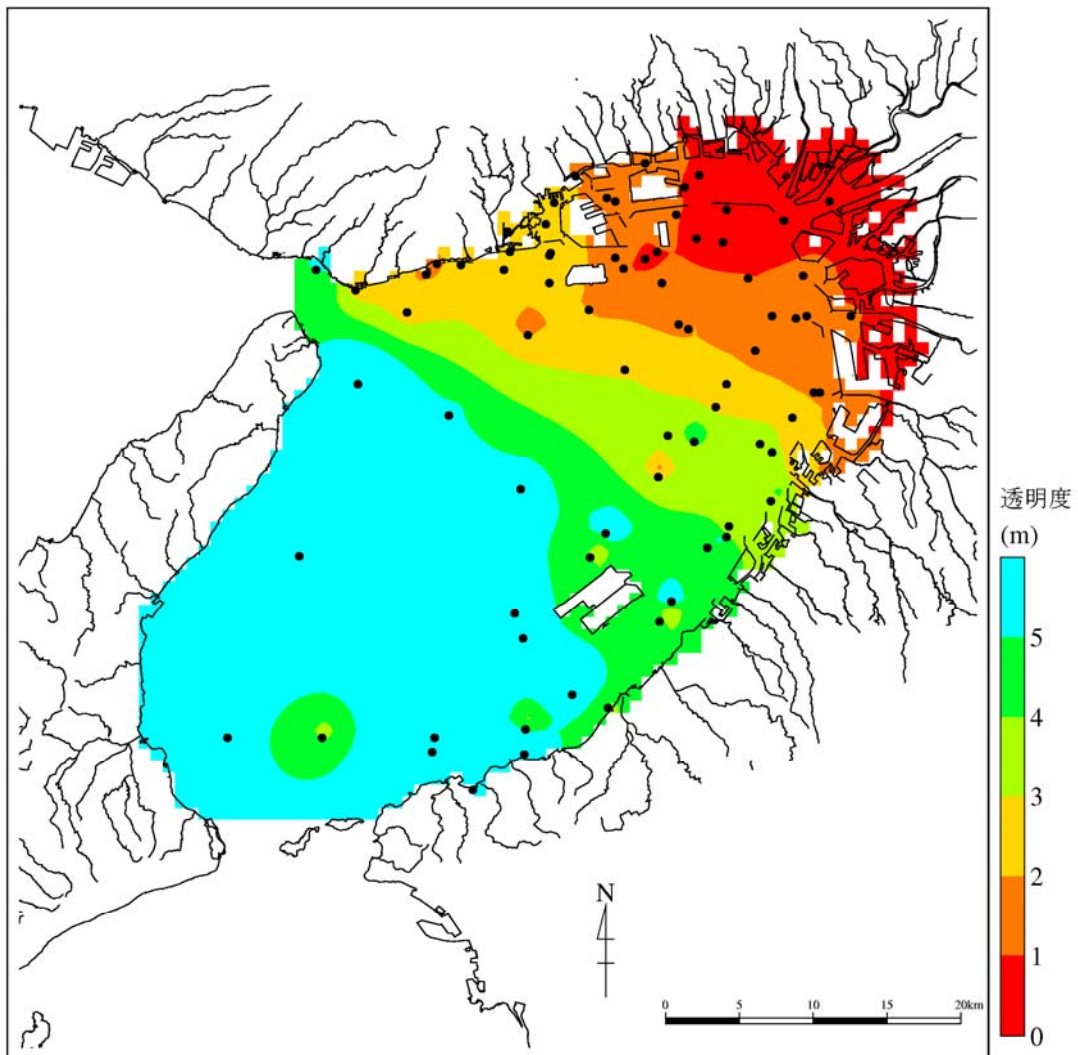
図 8 (1) 水質の水平分布（透明度）

【用語解説】

- ・透明度は、海や湖の水の透明さを表す指標です。
- ・値が低いほど水中に届く光の量が少なく、光合成を必要とする藻類などの水中植物の分布下限水深が浅いことを示します。

●透明度（後半）

- ・透明度は、大阪湾北東側の広い範囲で3 m未満の低い値となっており、岸近くの海域では1 m未満となっていました。
- ・一方、大阪湾西側では4 m以上となっており、東側と比較して高くなっていました。

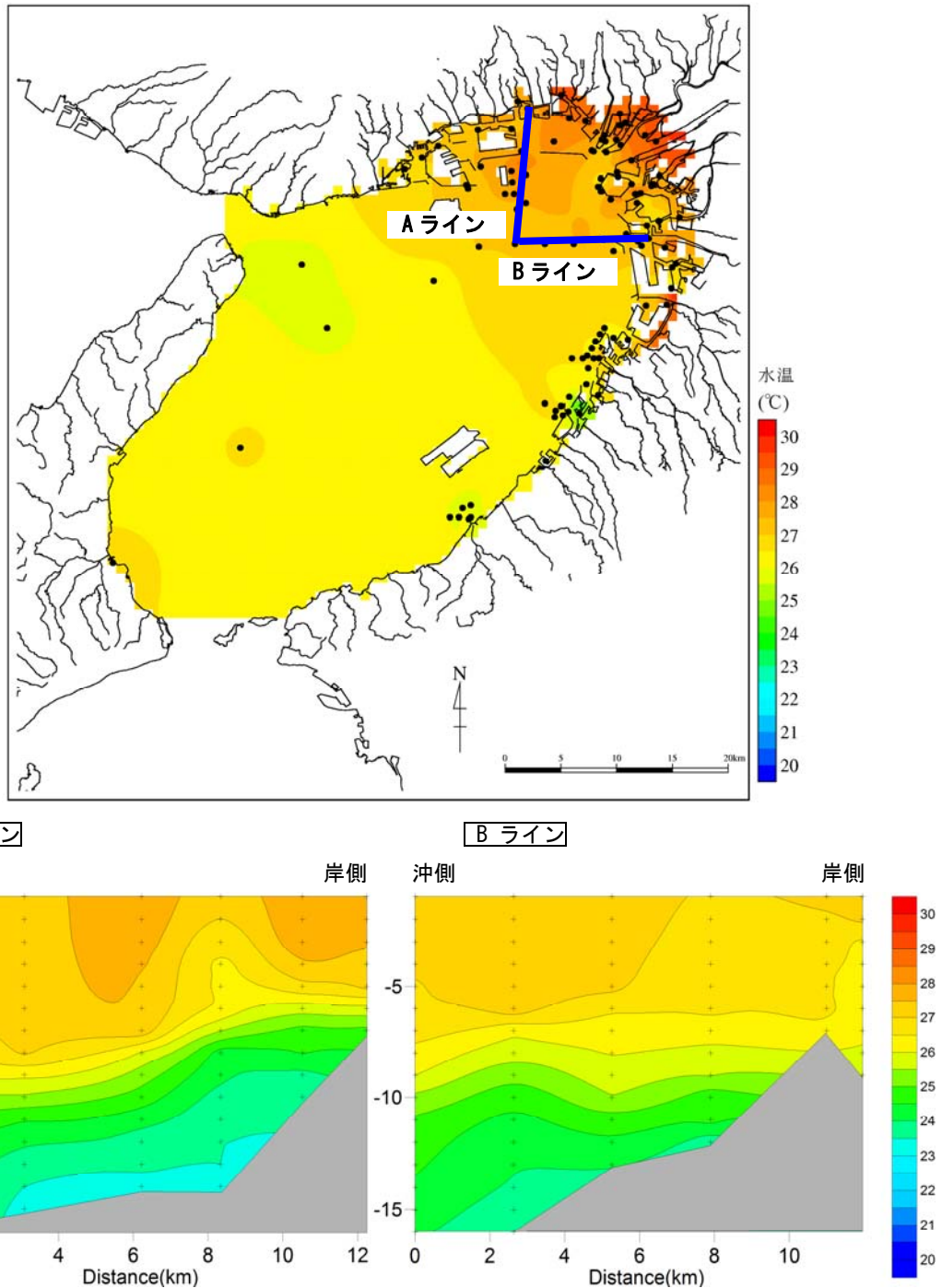


※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

図 8 (2) 水質の水平分布 (透明度)

●水温（前半）

- ・表層水温は、測定時刻、測定水深により値が変動するため明確な傾向は見られませんが、約 24～30℃の範囲で分布していました。
- ・大阪湾北東側の岸近くの海域で、29℃前後の高い値となっていました。
- ・鉛直的には、表層で高く、海底に向かうほど低くなっていました。

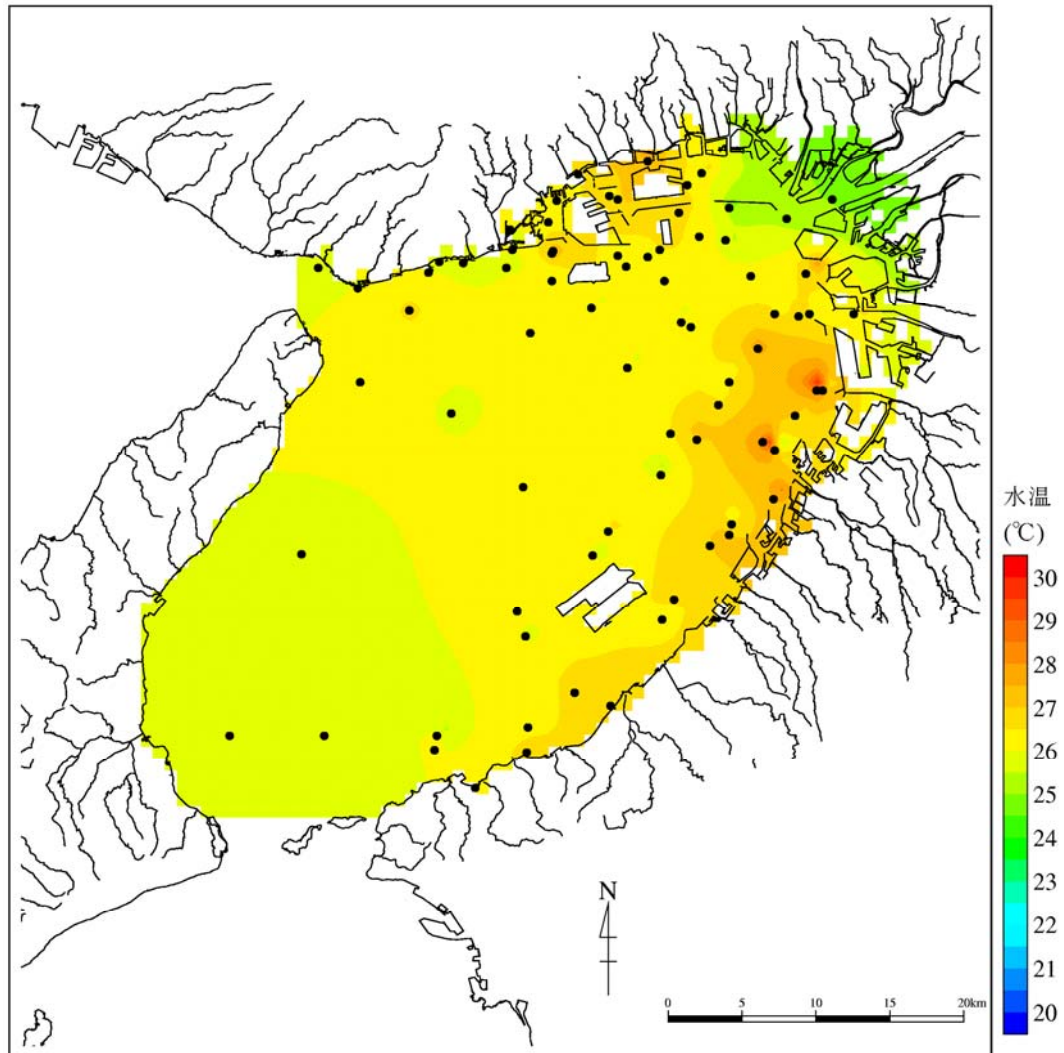


※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

図 9 (1) 水温の調査結果

●水温（後半）

- ・表層水温は、測定時刻、測定水深により値が変動するため明確な傾向は見られませんが、約24～30℃の範囲で分布していました。
- ・大阪湾北東側の岸近くの海域で、25℃前後の低い値となっていました。

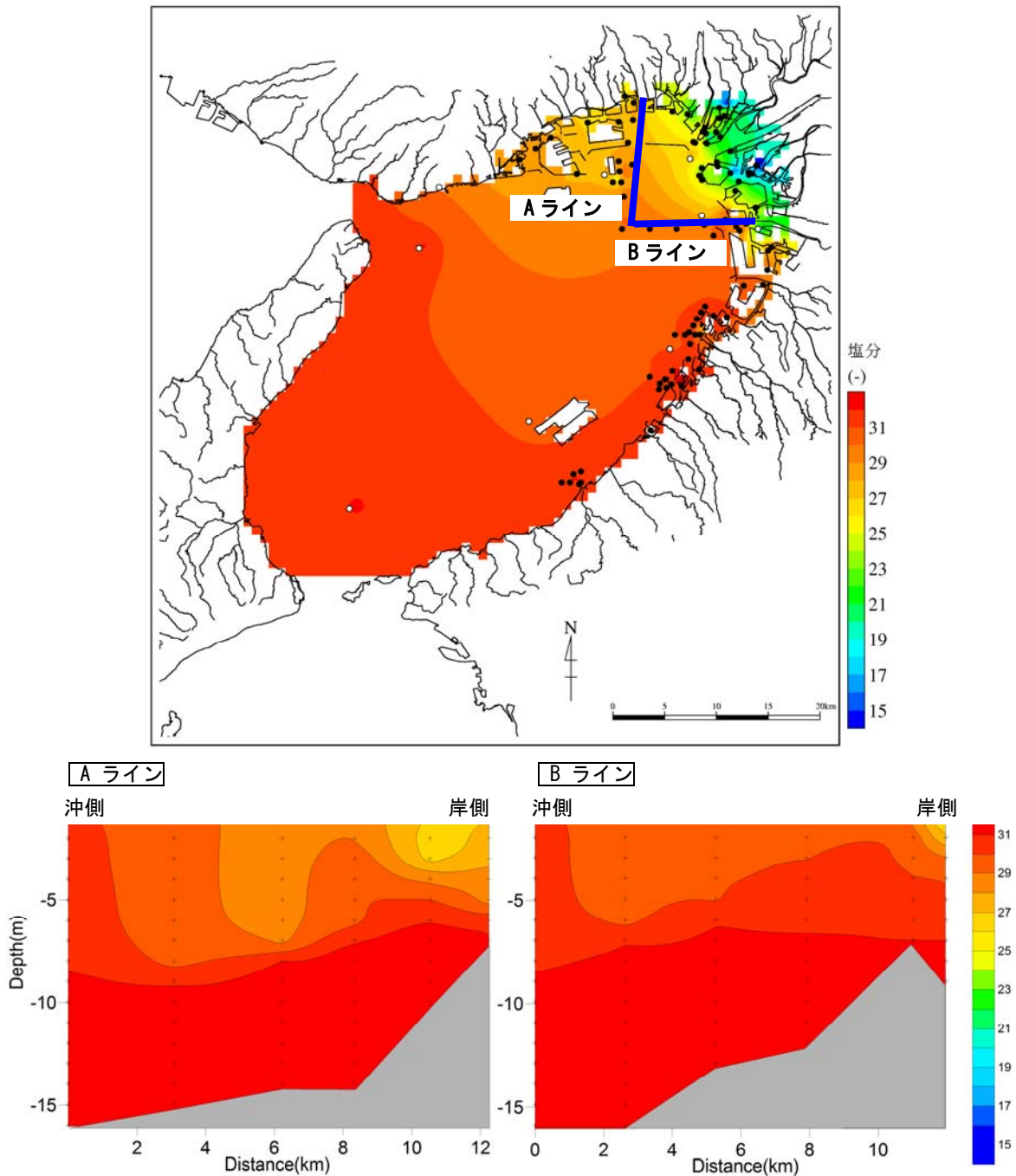


※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

図 9 (2) 水温の調査結果

●塩分（前半）

- ・表層塩分は、淀川や大和川の河川水が流入する大阪湾北東部で低く、西側で高くなっていました。
- ・鉛直的には、表層で低く、海底に向かうほど高くなる傾向がみられました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

※水水平分布図は、水質定点自動観測データ（8月3～7日の平均値）により補完した（図内白丸の地点）

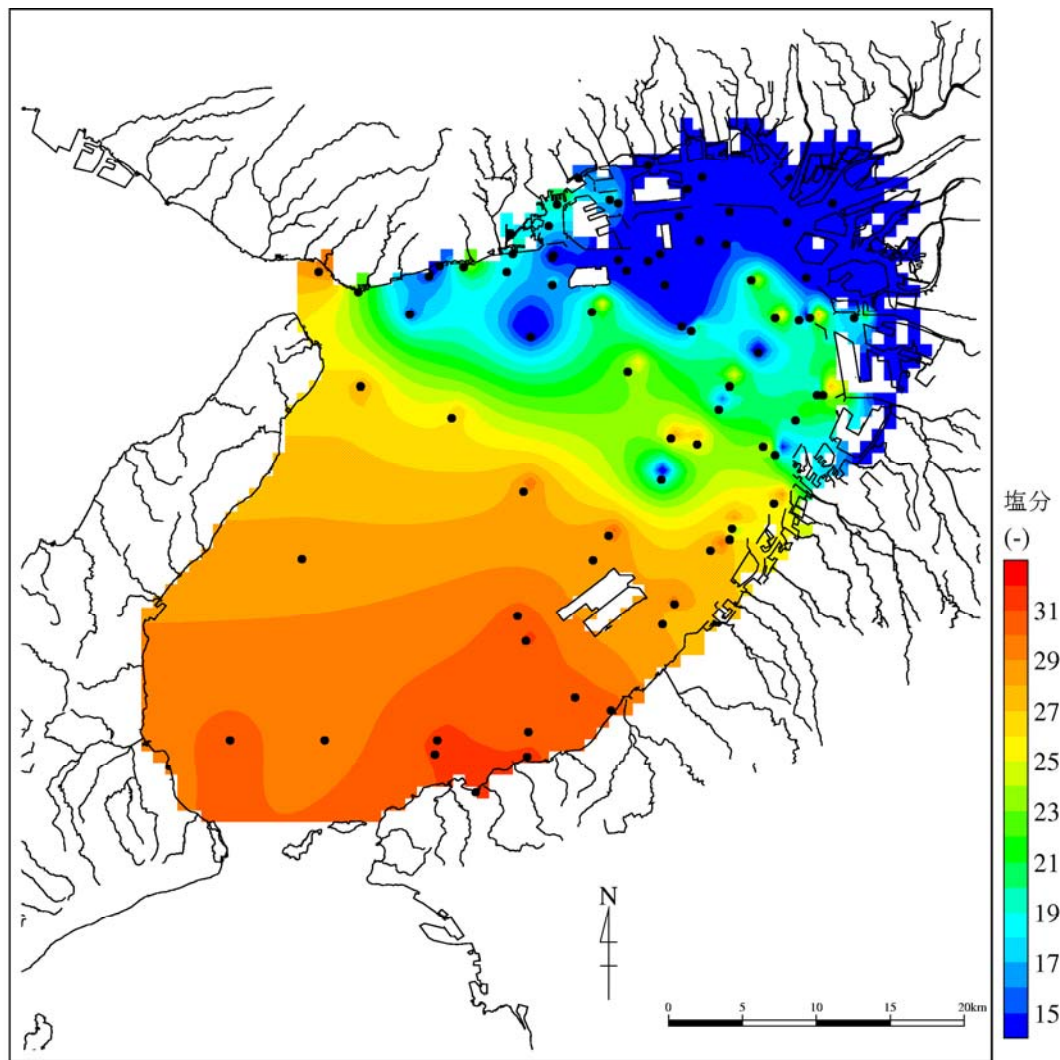
図 10 (1) 塩分の調査結果

【用語解説】

- ・塩分は、淡水と海水の混ざり具合を示す指標です。
- ・値が低いほど淡水が多く含まれていることを示します。

●塩分（後半）

- ・表層塩分は、大阪湾北東側の広い範囲で低く、西側で高くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

図 1 1 (1) 塩分の調査結果

過年度の調査結果との比較

●調査実施前の気象状況

各年度の調査実施前2週間の気象状況（平均気温、平均風速、日照時間、降水量）は以下のとおりとなっています。

- ・平成16年度は、調査実施2～3日前に台風が通過し、強い風が連吹していました。
- ・平成17年度は調査実施7～8日前に、平成19年度は調査実施4～5日前に、台風が接近したため、強い風が吹いていました。
- ・平成18年度は、調査実施10～13日前に大規模な降雨がありました。
- ・平成23年度は、前線の影響により調査実施8～10日前、台風の接近により調査前日から当日にかけては、比較的強い風が吹いていました。
- ・平成24年度は、調査実施7日前及び4日前に、台風の接近による比較的強い風が吹いていました。
- ・平成25年度は、過年度と比較して降水量は少なくなっていました。また、低気圧や前線の影響で調査の14日前及び2日前に、比較的強い風が吹いていました。
- ・平成26年度前半は、台風の接近により調査実施3日前から前日にかけて、降雨がみられました。また、調査日当日には、前線の影響により、比較的強い風が吹いていました。
- ・平成26年度後半は、前線の影響により、調査実施の7日前に比較的強い風が吹いていました。また、調査実施の3～4日前に台風が通過し、かなりまとまった降雨があり、また強い風が吹いていました。

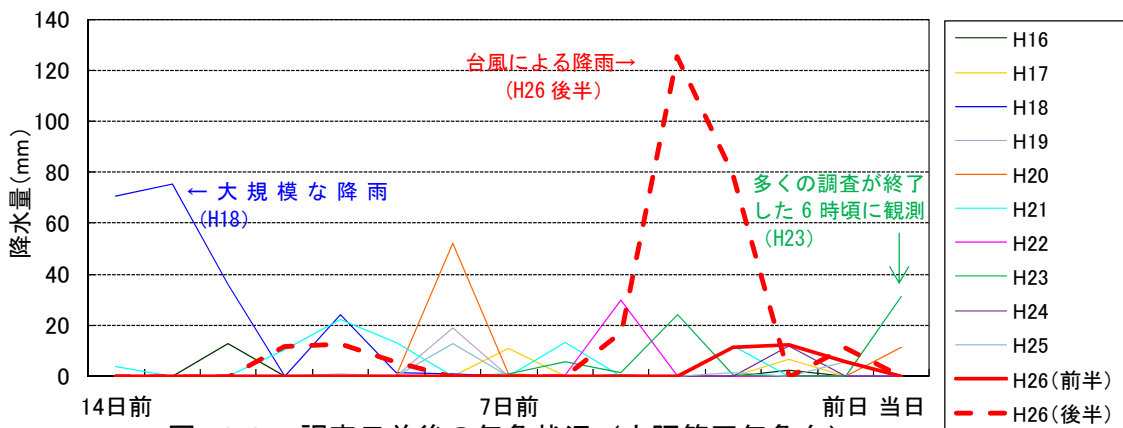
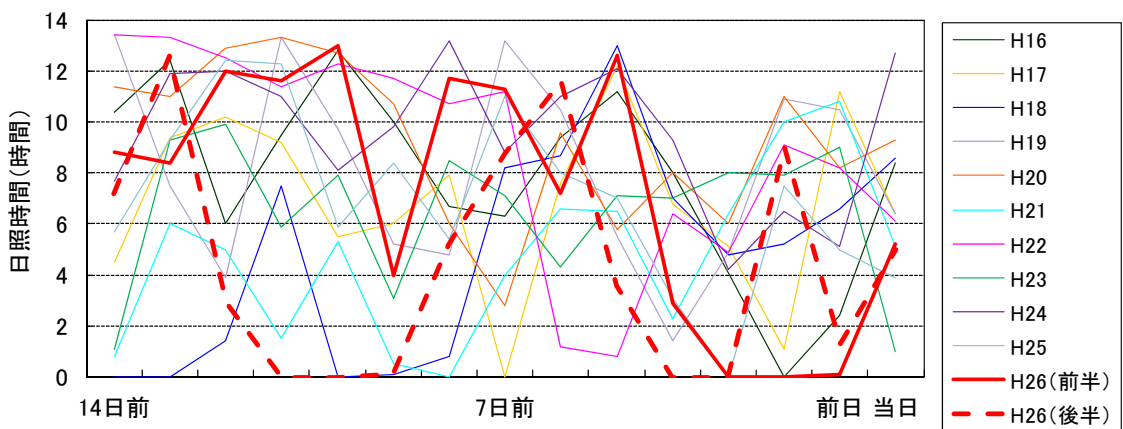
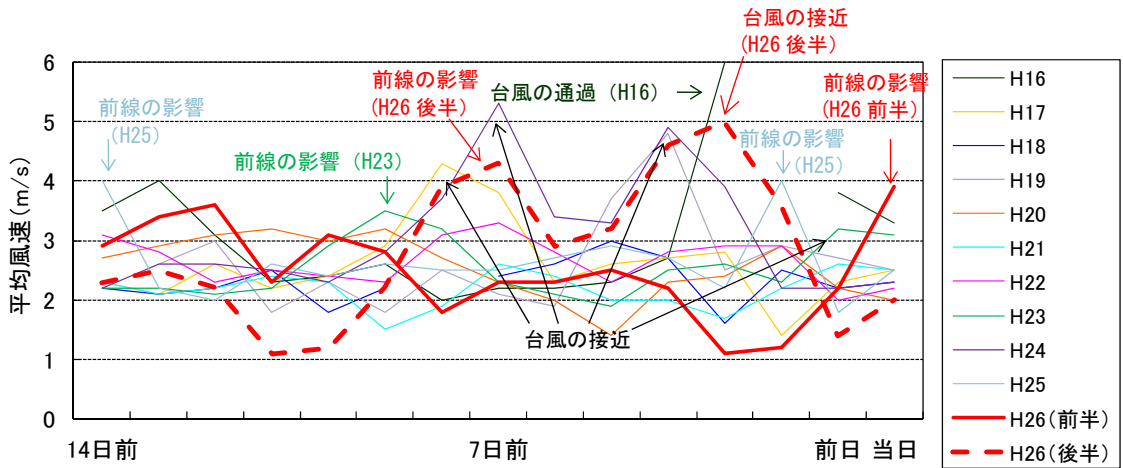
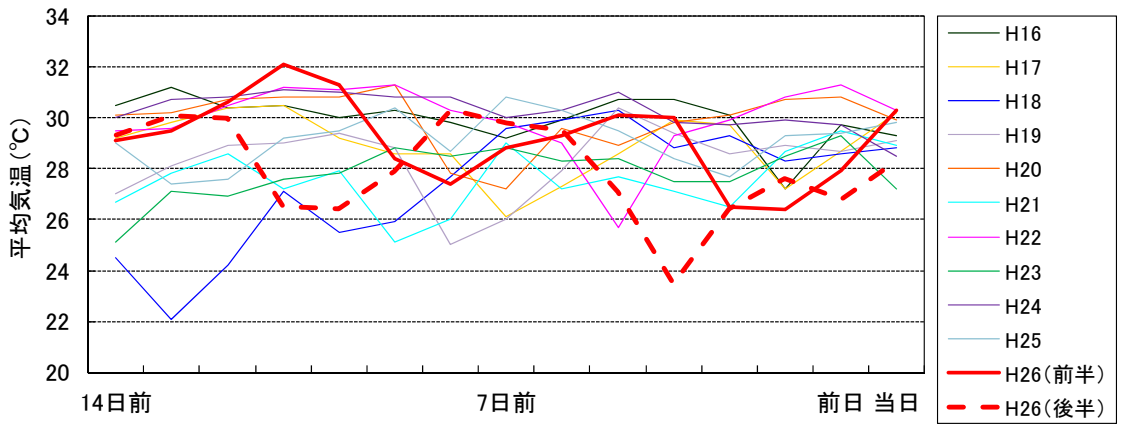


図 1 2 調査日前後の気象状況 (大阪管区气象台)

●底層DOの水平分布図

- ・調査実施前に降水量の多かった平成18年度は、底層DOの低い水域（3 mg/L以下）が湾中央部まで広がっていました。この要因としては、河川水の流入によって、陸域からの有機物が流入したことや、比重の小さい河川水が海水を覆うことによって、底層にまで酸素が供給されにくくなったことなどが考えられます。
- ・一方、調査実施前に風の強かった平成16、19年度は、底層DOの低い水域は岸近くのみ見られました。この要因としては、風によって海水が上下に混合され、底層にまでDOが供給されたことが考えられます。
- ・平成26年度前半の調査は、湾北東部の岸近くにおいて底層DOの高い海域（5 mg/L以上）がみられ、岸から少し離れた海域で低い値（2 mg/L以下）がみられました。同様の気象条件であった平成21、22年度と比較すると、底層DOの高い水域（5 mg/L以上）が広がっていました。
- ・平成26年度後半の調査は、底層DOの低い水域（2 mg/L以下）が減少していました。この要因としては、調査実施日の4～3日前にかけて通過した台風の強い風により海水が上下に混合され、底層にまで酸素が供給されたことが考えられます。同様の気象状況であった平成16年度と比較すると、湾北東部における底層DOの低い水域（2 mg/L以下）が解消されていました。

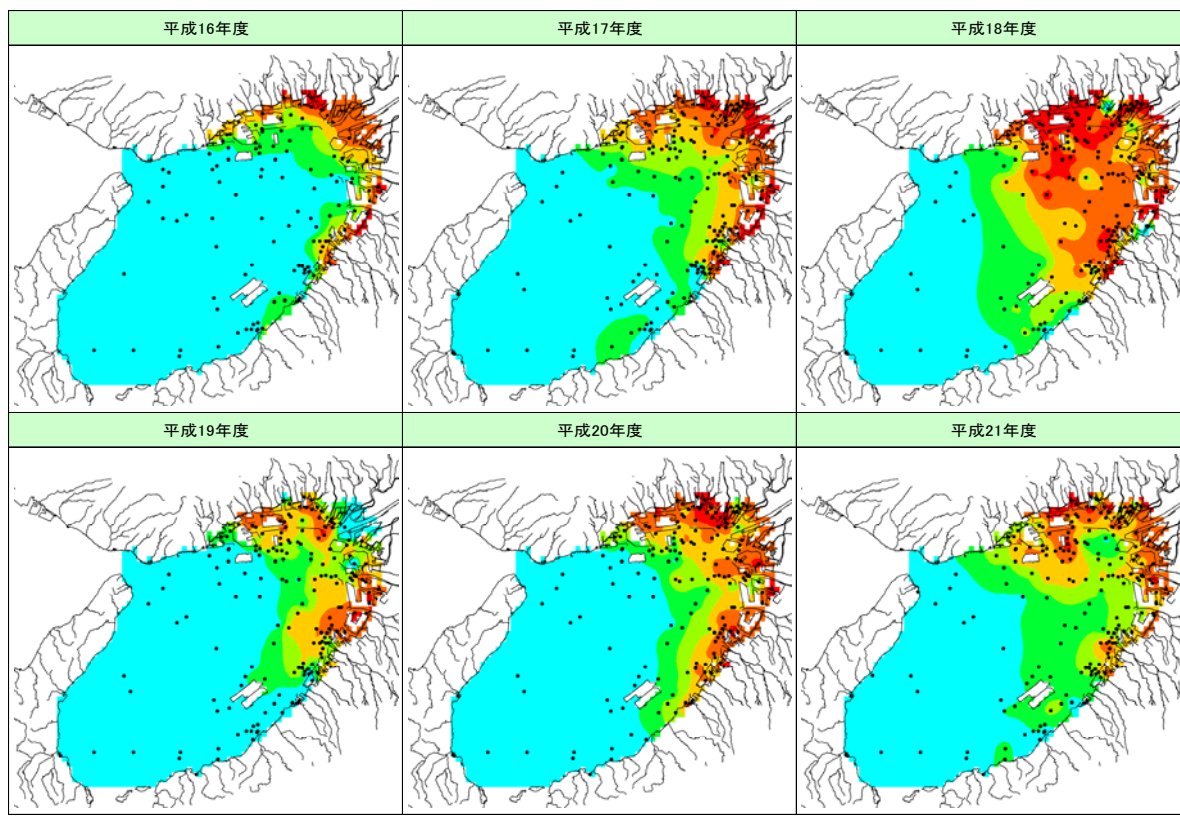
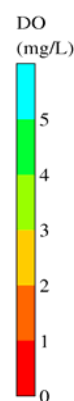


図 13 (1) 底層DOの水平分布図

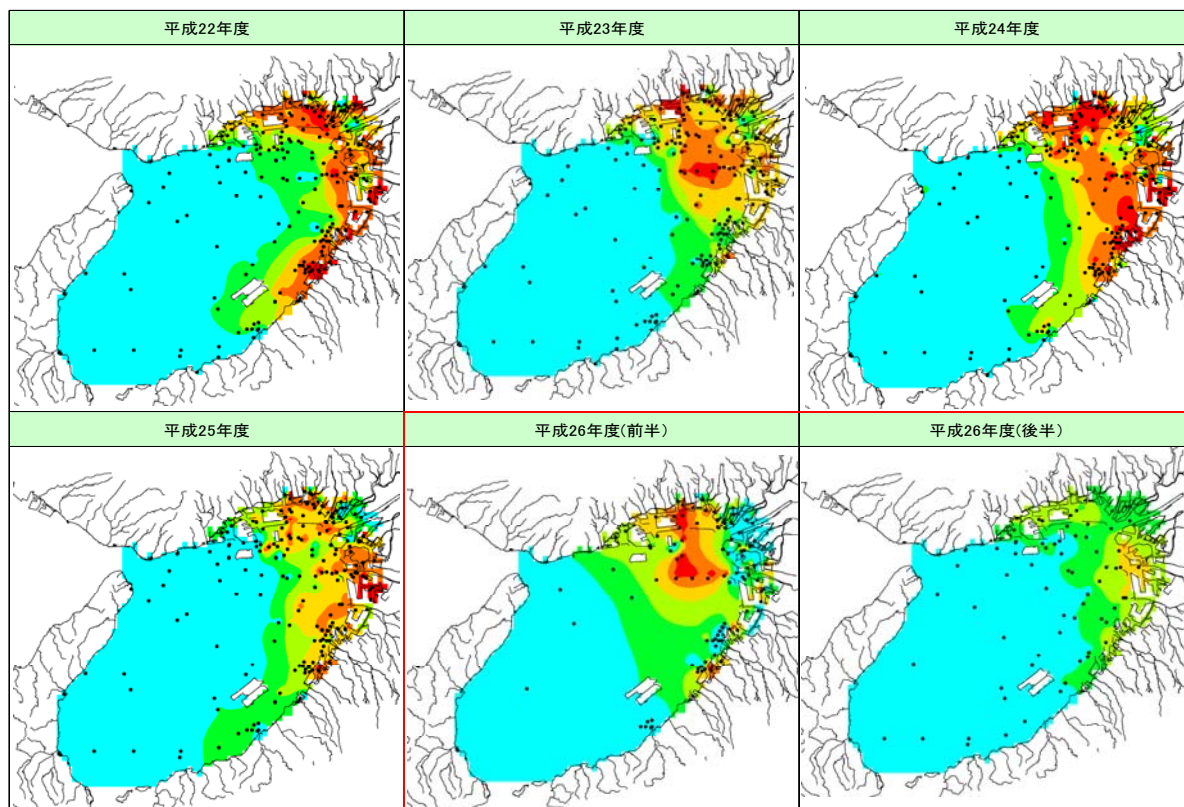


図 13 (2) 底層DOの水平分布図

●表層CODの水平分布図

- ・調査実施前に降水量が多かった平成18年度は、表層CODの高い水域（5 mg/L以上）は湾北西部まで広がっていました。この要因としては、河川水の流入によって、陸域からの大量の有機物が流入したことが考えられます。
- ・調査実施前に台風が接近した平成16年度、平成23年度は、表層CODの高い水域は大阪湾北部の岸近くの海域にのみみられました。この要因としては、風によって海水が上下に混合され、表層の高いCODが拡散されたこと等が考えられます。
- ・平成26年度前半の調査は、表層CODの高い水域（5 mg/L以上）は大阪北東部の岸近くのみにみられました。これは、降雨による小規模な出水によって陸域の有機物が流入したことが考えられます。同様の気象状況であった平成21、22年度と比較すると、表層CODの高い水域（5 mg/L以上）が減少し、表層CODの低い水域（3 mg/L以下）が広がっていました。
- ・平成26年度後半の調査は、表層CODの高い水域（5 mg/L以上）が減少していました。この要因としては、調査実施日の4～3日前にかけて通過した台風の強い風により海水が上下に混合されたことが考えられます。同様の気象状況であった平成16年度と比較すると、表層CODの高い水域（5 mg/L以上）が減少していました。

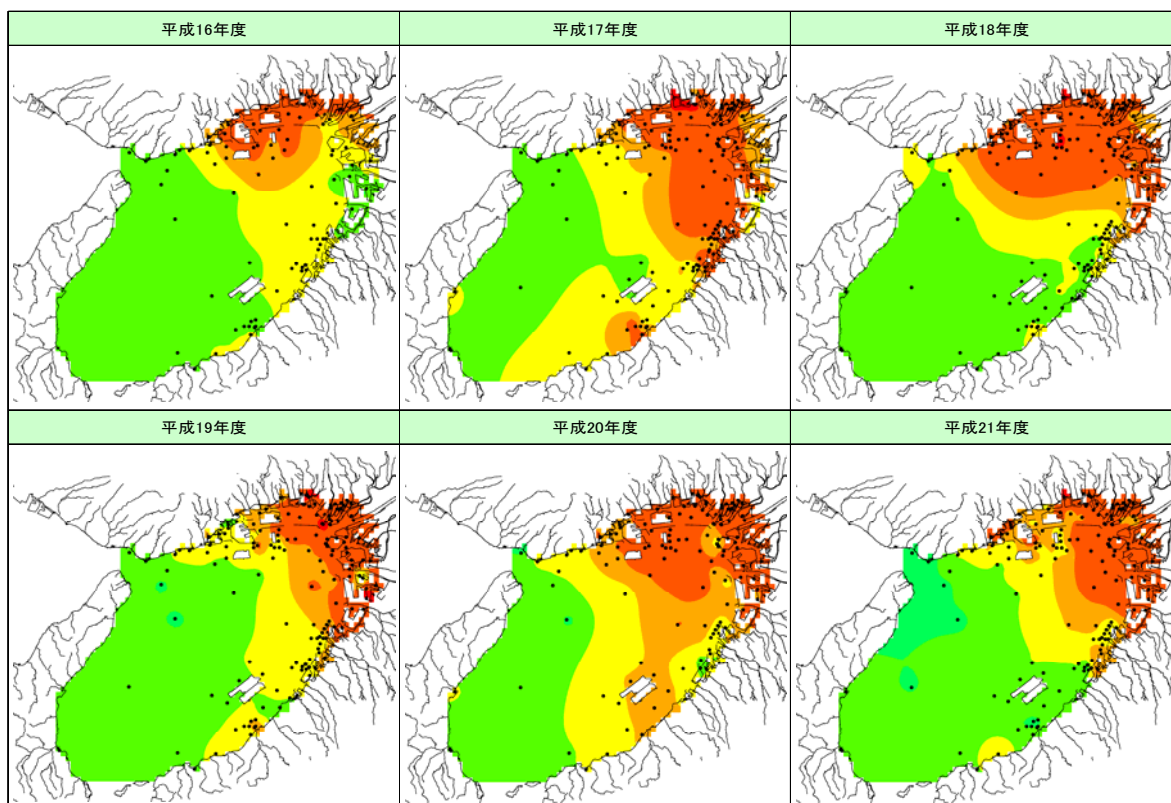


図 14 (1) 表層CODの水平分布図

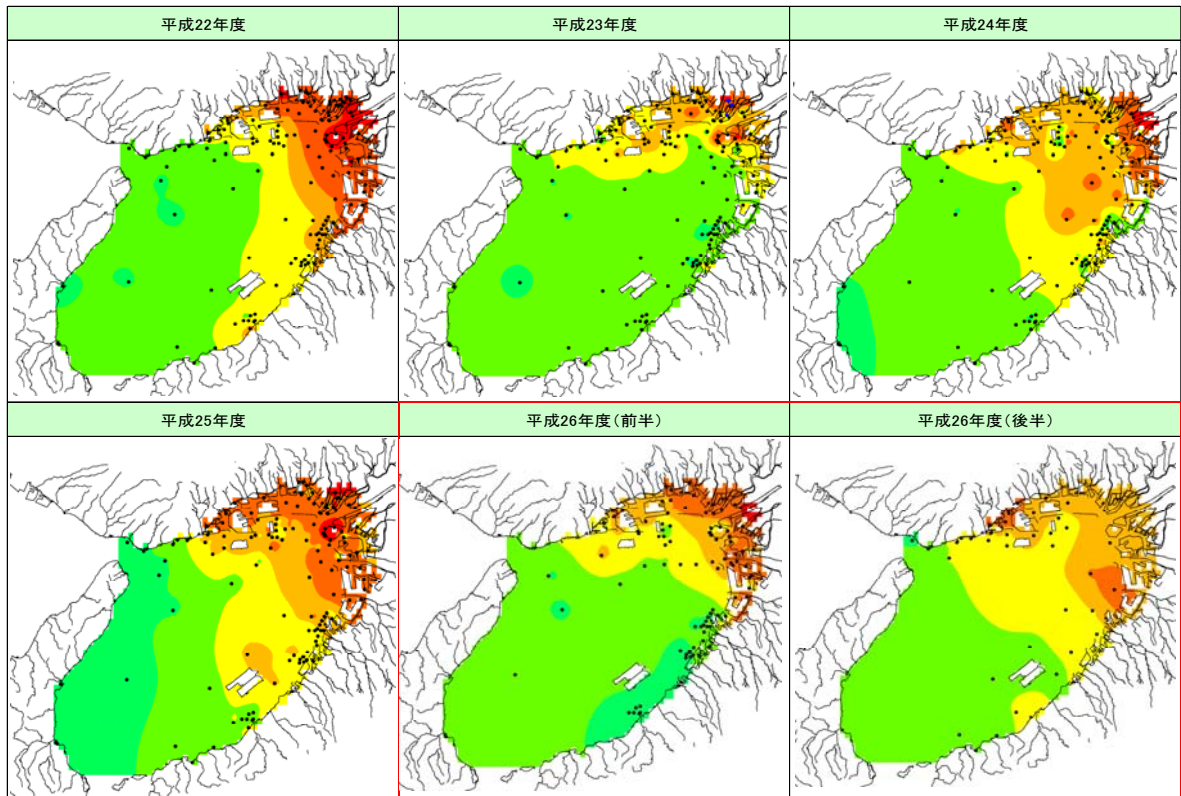


図 14 (2) 表層CODの水平分布図

水質の経年変化

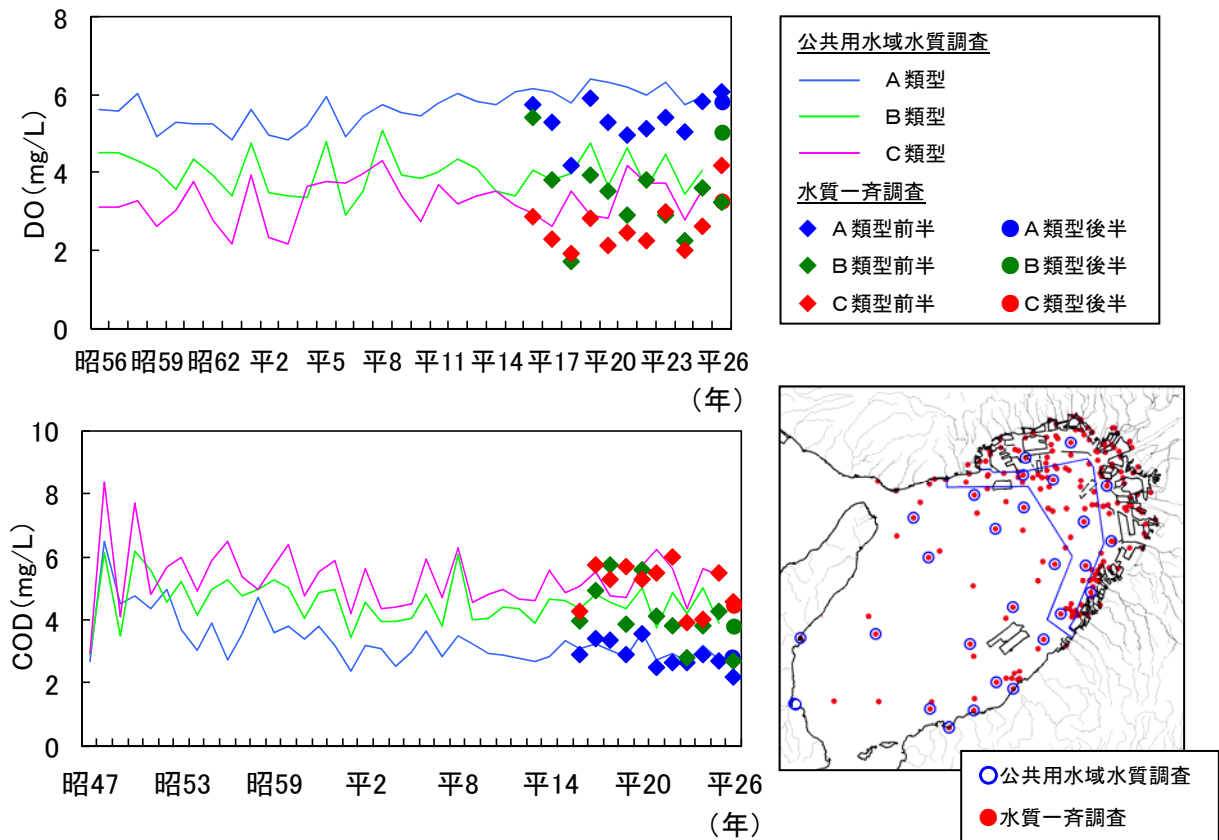
・大阪湾における水質の経年変化と水質一斉調査結果を比較するため、底層DOと、表層CODについて、公共用水域水質調査結果と水質一斉調査結果を併せて示しました。

●底層DO

- ・公共用水域水質調査結果では、昭和56年以降ほぼ横ばいですが、A類型海域は近年やや上昇傾向となっていました。
- ・水質一斉調査結果は、A類型、B類型については公共用水域水質調査結果と同様の値を示していましたが、C類型については公共用水域水質調査結果よりも低い値となっていました。この要因としては、水質一斉調査が、貧酸素化が最も激しくなる8月のみの調査であることに加えて、公共用水域水質調査と比較して岸近くの調査地点が多いためと考えられます。

●表層COD

- ・公共用水域水質調査結果では、昭和47年以降減少傾向が見られましたが、近年は横ばいとなっていました。
- ・水質一斉調査結果は、公共用水域水質調査結果とほぼ同様の傾向を示していました。



※公共用水域水質調査結果は、夏季の平均的な水質の経年変化を把握するため各地点の6～8月の平均値を環境基準の類型ごとに平均している。

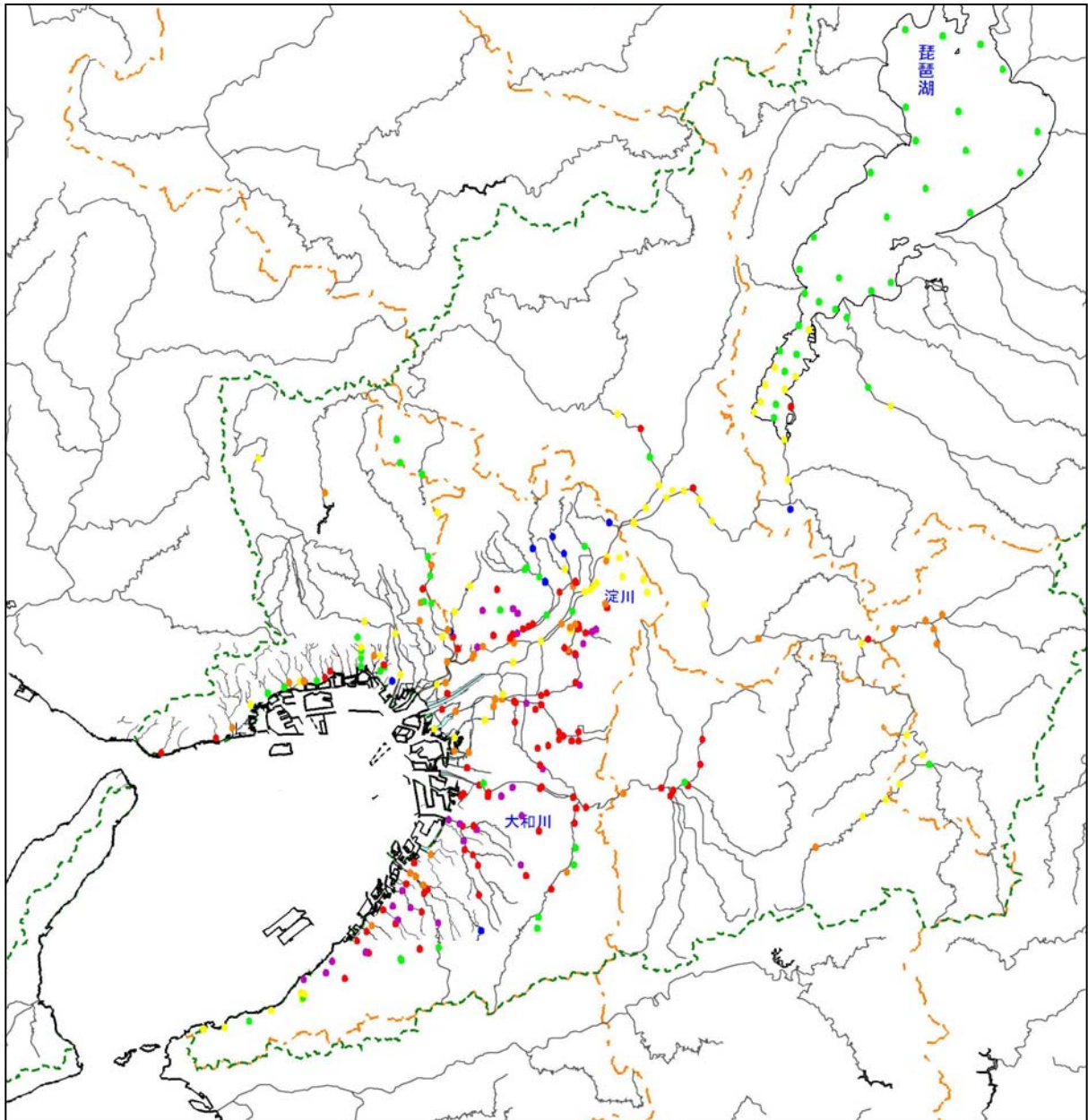
※水質一斉調査結果は、8月の1回限りの測定値を類型ごとに平均している。

※平成26年度の調査については、前半と後半に分け、菱形(◆)は前半の調査を、丸(●)は後半の調査を示す。

図 15 水質の類型別経年変化

参考資料 1 : 陸域の化学的酸素要求量 (COD)

- ・陸域のCODは、琵琶湖ではほとんどの地点で2～4 mg/L の値を示していました。また、河川においては、5～8 mg/L の値を示す地点が多くみられました。



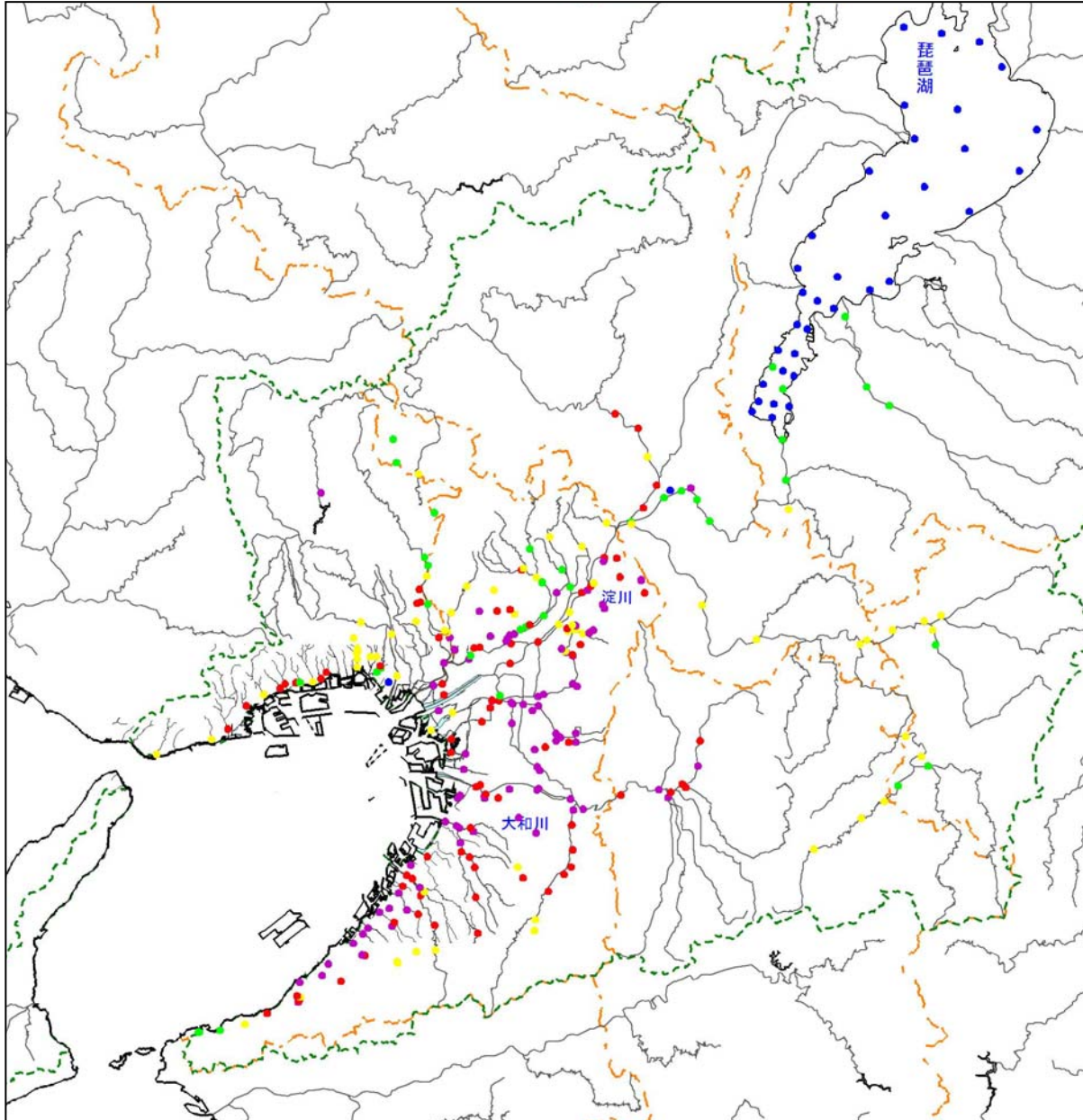
※黒色の実線は河川流路、緑色の破線は大阪湾集水域界、橙色の1点破線は府県境界を示す。

凡 例	
●	: >8 mg/L
●	: ≤8 mg/L
●	: ≤5 mg/L
●	: ≤4 mg/L
●	: ≤3 mg/L
●	: ≤2 mg/L
●	: ≤1 mg/L

付図 1 水質の水平分布 (陸域 : COD)

参考資料 2 : 陸域の全窒素 (T-N)

- ・陸域のT-Nは、琵琶湖ではほとんどの地点で0.3 mg/L以下の値を示していました。また、河川においては、1~2 mg/Lの値を示す地点が多くみられました。



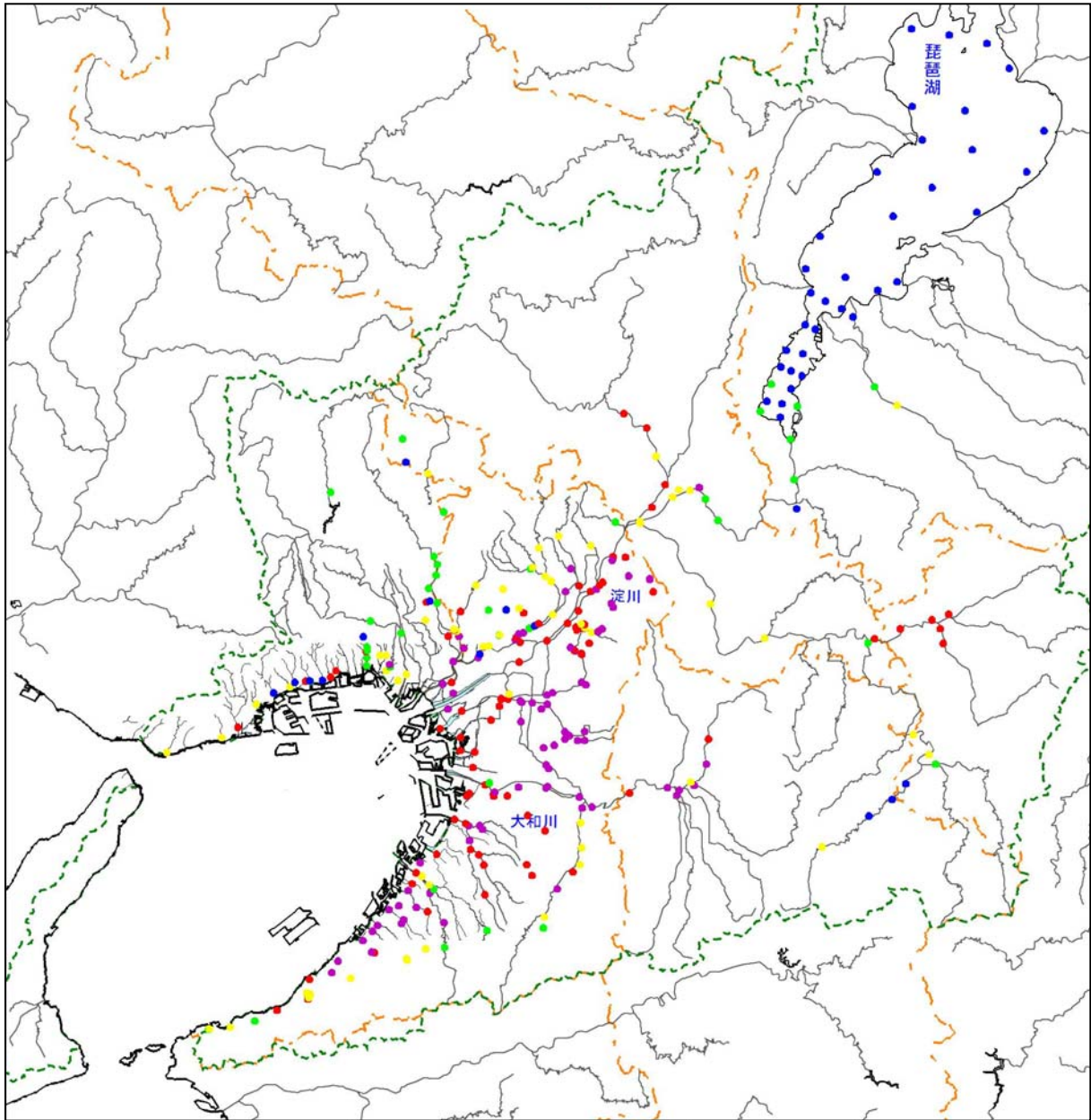
※黒色の実線は河川流路、緑色の破線は大阪湾集水域界、橙色の1点破線は府県境界を示す。

凡 例	
●	: >2 mg/L
●	: ≤2 mg/L
●	: ≤1 mg/L
●	: ≤0.6 mg/L
●	: ≤0.3 mg/L

付図 2 水質の水平分布 (陸域 : T-N)

参考資料3：陸域の全リン（T-P）

- ・陸域のT-Pは、琵琶湖では、ほとんどの地点で0.03mg/L以下の値を示していました。また、河川においては、0.09～0.2mg/Lを示す地点が多くみられました。



※黒色の実線は河川流路、緑色の破線は大阪湾集水域界、橙色の1点破線は府県境界を示す。

凡 例	
●	: >0.2 mg/L
●	: ≤0.2 mg/L
●	: ≤0.09 mg/L
●	: ≤0.05 mg/L
●	: ≤0.03 mg/L

付図3 水質の水平分布（陸域：T-P）